

空間とアート

近代を問い直す建物と室内

CONTENTS

36	2	43	48
なぜライトは、建物・窓・家具を連続するものと考えたか		なぜ戦後の住宅は、規格部材を場所に合わせて組み替えたか	
37	8	44	54
なぜデ・ステイルは、部屋を固定した箱として扱わなかったか		なぜ室内装飾家はクラブの部屋ごとに異なる表情をつくったか	
38	15	45	59
なぜバウハウスは、工房・授業・試作・建物を結ぼうとしたか		なぜ戦後の公共建築は、コンクリートと歩く都市を前面に出したか	
39	22	46	65
なぜ近代建築は、個人の住宅から集合住宅と都市の問題へ広がったか		なぜヴァナ・ヴェンチャー邸の正面は、親しみある家型をずらしたか	
40	29	47	71
なぜ療養所は、病室の光・色・椅子まで設計したか		なぜバラガンは色、壁、庭を近代住宅の中心に置いたか	
41	35	48	78
なぜ標準化した台所は「誰が家事をするか」を含んでいたか		なぜガンドの学校群は、土と屋根の関係を建物ごとに試したか	
42	41		
バルメ図書館は、植民地期の創設から独立後のレゴンへどう移ったか			

VOLUME 01 / PART IV / CHAPTER 36

なぜライトは、 建物・窓・家具 を連続するもの と考えたか

Little家の施主、湖の眺望、演奏の用途が、Wrightの図案を変えた。館内に移された居間を原位置の景色と混同せず、設計図・家族の記録・現況を照合する。

米国・Francis W. Little House居間／1912～14年、The Met再設置

実物・記録を見比べる

出典 6 件



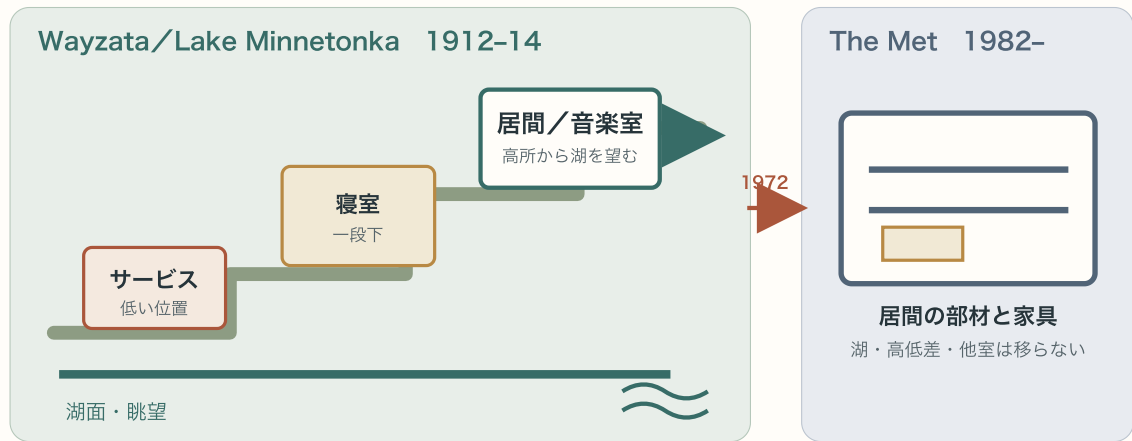
▶ Gerda Arendt / Wikimedia Commons・Little House居間：1912～14年／The Met再設置：1982年／撮影：2022年・CC BY-SA 4.0 図版情報

湖畔の地形から室の高さが決まる

The Metの解説によれば、FrancisとMary Littleはミネソタ州WayzataのLake Minnetonka岸の夏の家をWrightに依頼した。家は湖岸に沿って約250フィート伸び、二つの丘の起伏へ応じて棟を十字状に配置する計画だった。居間は眺めを得る丘の頂に、寝室は一段下に、厨房などのサービス空間は丘の麓に置かれた。館に移された居間の水平に長い窓を見ても、当初の敷地の高低差は分からない。建物の断面に相当するこの説明を先に読むと、窓が一つの装飾帯ではなく、居間の高い位置と湖面の関係を受けることが分かる。来訪者は曲がる砂利道から大きな階段を上り、低い玄関を抜けて居間に入ったという。館内ではこの到達の体験が失われているので、現在の展示入口からの第一印象を原住宅の入口と重ねない。ここにある模式図は、The Metの文章にある高低と移動の関係だけを示す。湖岸に対する正確な方位、室の距離、原図の壁線は描いていない。原住宅の歴史写真と家具平面は館のページへ戻って確認する。^[1]

Little House : 失われた敷地の関係

湖畔の原位置と The Met の再設置室を別の資料として読む



Francis Littleは窓の線を減らして湖の眺めを守るよう求め、Mary Littleは居間で演奏した。
The Metの解説文から作図。原住宅の平面・断面・方位・距離を再現したものではない。artbrane, 2026

図面・記録

原敷地と再設置室／高低関係の模式

2026年作図

Met一次解説にある湖、丘上の居間、一段下の寝室、低所のサービス部、1972年解体と1982年再設置を位置関係だけ模式化。原図・実測断面・原景写真ではない。

artbrane（一次資料の記述から独自作図）・ [Original diagram](#)・CC BY 4.0・ [元資料](#)^[1]

窓の線は施主との交渉で減らされた

居間の両長辺には、各側十二枚の窓が並び、上部の高窓や端の扉にも幾何学の線が反復された。だがFrancis Littleは、Wrightの最初の線が湖の眺めを遮るとして複数の案を退けた。Wrightは中央へ近づくほど鉛の模様を減らし、透明な大きいガラス面からLake Minnetonkaを見られるよう改めた。館の現況写真では、端の細かなパターンと中央の透明度の差を同じ窓壁で比べる。ここに見えるのは「統一した美学の徹底」だけではない。設計者が望む装飾と施主が守りたい景色の具体的な交渉が、窓の密度を変えた。Wright自身は修正案を物足りなく感じた
と館は記す。現状の線を作作者一人の純粋な最終意図として説明しては、Little家の選択を消してしまう。窓からの現在の眺めはニューヨークの展示環境であり、湖の写真と合成しない。^[1]



同一対象

Wright Roomの別視点

Little House居間：1912～14年／The Met再設置：1982年／
撮影：2014年

同じ館内展示室の2014年写真。原住宅の内観ではない。

Elisa.rolle / Wikimedia Commons · [CC BY-SA 4.0](#) · [元資料](#) ^[4]



別個体・対照

Little House由来の別室の窓

Little House居間：1912～14年／The Met再設置：1982年／
撮影：2016年

ビリヤード室の別部材。居間の窓と誤認しない。

Sailko / Wikimedia Commons · [CC BY 3.0](#) · [元資料](#) ^[5]

36 / 03

居間はMary Littleの音楽室でもあった

Mary Littleはドイツで学んだピアニストで、家族はこの居間を「music room」とも呼んだ。室の長さ、周縁に座る場所を設けた構成は、読書や会話とともに演奏を聴く用途へ結びつく。WrightはMaryのピアノを周囲の家具に調和させる木製ケース案を描いたが、建築費が膨らみ実現しなかった可能性が高い。実際に使われたのは、自然主義的な彫刻を施した19世紀のロココ・リヴァイヴァルの暗い木製ピアノだった。ここが、住人の好み・予算と「建築家の全体設計」が一致しなかった明瞭な例である。未製作の設計図を、写真中に存在した家具として描かない。居間が整然と統一されて見える館内写真の外側には、採用しない設計を選ぶ家族の判断があった。家具の形だけで生活を決めつけず、館が記すMaryの演奏活動と未実現のケースを併記する。^[1]



同一対象

Wright Roomの窓と家具

Little House居間：1912～14年／The Met再設置：1982年／
撮影：2014年

同じ展示室の別角度。原位置の外景はここにはない。

Elisa.rolle / Wikimedia Commons · [CC BY-SA 4.0](#) · [元資料](#) ^[6]

36 / 04

家具の設計図、1942年写真、家族の配置

Wrightは居間用に家具平面を描き、椅子八脚、テーブル五台を含む数と位置を示した。しかしThe Metは、図にある家具が全て製作されたとは考えていない。家の家具には、Little家が以前住んだPeoriaの住宅から持ち込んだ、1902～03年頃の濃い染色の家具もある。Wayzata向けの1912～14年頃の家具はより淡く簡素だ。現在の室内を「一時点に全て新造されたセット」としない。また1942年に出版用撮影が行われた際、Wrightが家具を自分の望む位置に並べたと娘Eleanorは回想し、撮影後に家族は好みの配置へ戻したという。設計図、出版写真、家族の日常、1982年以降の館内展示は四つの異なる配置である。館の展示は設計図を参考にしているが、来館者が見る整った状態を家族が毎日維持したと主張できない。 ^[1]

36 / 05

1942年の写真と家族の配置は同じでない

The Metの解説はWrightが1942年の掲載写真のために居間の家具を配置し直し、その後Little家が自分たちの使いやすい位置に戻したと記す。設計者が示した完成イメージと住み手の日常が違ったことを示す貴重な記録である。館内再設置室に並ぶ家具は、現在の展示判断も加わった第三の時点になる。家具の作者や設計年を調べる際も、Peoriaの先行住宅由来の品とWayzataのLittle House向けの品がある。見た目が揃うから全て1912～14年に同じ部屋のために作られたとしない。MetはWrightのピアノケース案が費用のため実現せず、Mary Littleは別の口ココ・リヴァイヴァルのピアノを使ったことも記す。居間を『総合芸術作品』として一本の作者へ閉じると、施主の選択、予算、演奏の実際が消える。 ^[1]

36 / 06

原位置の解体と1982年の再設置

一家が家を維持しきれず、1970年代初めには大きな居間を閉めていた。敷地に小さな住宅を建てるには元の家の解体が必要になる地域の規則もあり、1972年、The Metが居間を取得して解体・移設した。ほぼ十年の保管と保存を経て、1982年に館内で公開された。館の説明はこの移設が空間概念を断片化し、敷地の地形と景観を切り離したことを自ら認める。一方で部材と多数の原家具を破壊から守った。現況写真に写る窓、暖炉、腰壁、造り付け座具は、原住宅に由来する実物の証拠だが、そこから外へ伸びる景観や別棟の動線は展示で再現されない。原室の歴史写真・家具平面はThe Metのページで確認できる。ここにある展示室写真だけでは原敷地での家具配置や高低差を確かめられない。章内模式図は高低差と移設を説明するもので、写真や原図を描き直したものではない。^[1]

36 / 07

一体設計を、三つの意思へ分解する

この室を読むときはWrightの設計、Little家の採否、The Metの保存展示という三者を分ける。窓の線が変わったのは施主の眺望要求、ピアノケースが未製作だったのは実生活の事情、現在の家具配置には館の展示判断が入る。建築から窓、造り付け、可動家具へ連続して設計したという事実は強いが、その連続が家族のすべての選択を消したわけではない。比較用の別室の窓を同じ居間へ貼り戻さない。ビリヤード室の窓や別の住宅の家具を使うなら、個別の来歴をラベルに書く。制作の判断へ移すなら、窓の向こうの具体的な景色、そこに座る人の活動、家具の可動性を聞くことになる。水平線を見た目だけ写すと、Little家と湖の関係を失う。^[1]^[2]

The Metの展示室は1912～14年のLittle家の部材を移したが、外に見えるのはミネソタの湖ではなく博物館の展示環境である。部屋の窓について施主が眺めを優先した変更と、Mary Littleが演奏に使った用途は、解説という使用記録で初めて分かる。写真の窓が連続して見えることだけから施主の交渉は発見できない。家が解体され一部が保存された1972年、Metで居間が設置された1982年を分ければ、設計年・使用年・展示年の差が見える。原位置の景色や1920年代の日常を館内の現況で再現したと主張しない。^[1]^[2]

Metの解説にある窓は居間の両側に各12枚並び、中央の鉛棧の意匠を減らした経緯が記される。現在の展示室の窓写真でも反復は見えるが、施主が湖の眺望を守ろうとした意図は写真だけでは分からない。館内に移された部材が示す形と、原位置で窓の向こうにあった景色を別の証拠として扱う。1942年の撮影用配置も原位置の一時点であり、現在の展示室の標準配置と一続きの現況ではない。^[1]^[2]

READING PRACTICE

一枚に戻って考える

館内再設置室の写真で確認できる「連続」と、原住宅について確認できないことを分ける。

考える手がかり：窓・木部・家具の視覚的な連続は見える。原住宅の外景、家族の座り方、館内に移されなかった室との関係は写真だけでは分からない。

Little家の原位置を写した1914～15年の写真、家具平面、ピアノケース設計図はThe Metのページで確認できる。ここにある模式図は敷地と室の高低関係を文章から整理したもので、原図の寸法や建築細部を示さない。展示室の現況写真を原住宅の生活写真と取り違えない。

SOURCE REGISTER

出典・図版

[1] [The Met, Frank Lloyd Wright Room](#)

<https://www.metmuseum.org/about-the-met/collection-areas/the-american-wing/period-rooms/frank-lloyd-wright-room>

[3] [Gerda Arendt / Wikimedia Commons](#)

https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Metropo%C3%B6litan_Museum%2C_FLW_room.jpg

[5] [Sailko / Wikimedia Commons](#)

https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Frank_lloyd_wright%2C_finestre_dalla_stanza_da_biliardo_delle_francis_W_little_house%2C_1912-14.jpg

[2] [The Met, Little House living room record](#)

<https://www.metmuseum.org/art/collection/search/7873>

[4] [Elisa.rolle / Wikimedia Commons](#)

https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Metropolitan_Museum_of_Art_%28010%29.JPG

[6] [Elisa.rolle / Wikimedia Commons](#)

https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Metropolitan_Museum_of_Art_%2808%29.JPG

VOLUME 01 / PART IV / CHAPTER 37

なぜデ・ステイルは、部屋を固定した箱として扱わなかったか

色面、窓、可動壁を住む人の動きとともに見る。抽象画を三次元に置いたという一方向の説明を避ける。

オランダ・ユトレヒト／Rietveld Schröder House、1924年

実物・記録を見比べる

出典 7 件



► Andreas 2309 / Wikimedia Commons · Rietveld Schröder House : 1924年／撮影：2011年・CC BY-SA 3.0 図版情報

外観の面をそのまま室内へ持ち込まない

Gerrit RietveldとTruus Schröder-Schräderが1924年に形にした家は、外から見ると白と灰の面、黒い線、原色の細部が互いにずれて重なる。しかし外観の見え方だけで室内の使い方は分からない。保存機関が公開する室内記録では、上階は可動の間仕切りによって一つの連続空間にも、複数の個室にもなる。色の線は絵画の構図を模倣した飾りというより、柱、手すり、家具、動く壁の境目を知覚させる。建物をぐるりと見る写真と上階の写真を往復し、面の関係が身体の移動で変わることを確かめる。[\[1\]](#)[\[2\]](#)

可動壁が閉じるとき、色面の配置だけでなく、誰から誰が見えるかが変わる。開いた写真を見て広く感じるのと、実際に閉じた状態を観察することは別である。現況の保存展示では壁の操作が制限される可能性もある。[\[1\]](#)[\[2\]](#)

2017年模式平面は操作を問う入口

掲載した2017年作成の模式平面は、上階の仕切りが開いた場合と閉じた場合を図として対置する。これは1924年にRietveldが提出した原図ではない。写真の広い上階を見ると、どの線が固定壁でどれが動くかは一枚だけでは分からない。説明平面の可動線を手掛かりに、保存機関が公開する動画で実際の開閉を確かめる。資料が異なる時点に属することを明示すれば、開放した状態の写真二枚を偽の前後比較として使わずに済む。[\[1\]](#)

可動壁は誰の一日を受けるか

上階の間仕切りを開くと家族が集まる場になり、閉じると個々の居場所に分かれる。これは固定された一枚の平面が二つの状態を持つという具体的な設計である。写真には開いた状態が写っていても、壁の動きや閉じたときの音、家族がいつ開閉したかまでは映らない。保存機関の動画と平面を合わせ、壁がどこで止まり、家具と干渉しないかを確かめる必要がある。現在の見学のために整えられた配置を、1924年の生活写真の代わりにしない。

Truus Schröderの住まい方と設計への関与を、Rietveld一人の形式実験として消さない。[\[1\]](#)



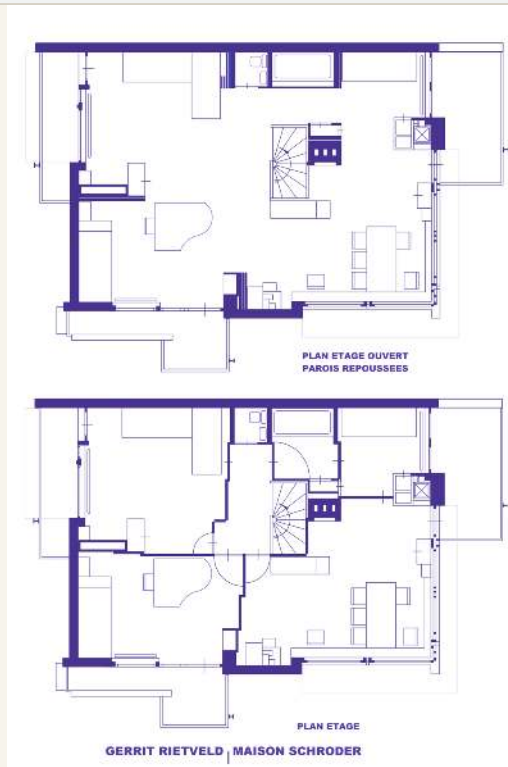
同一対象

同住宅・室内

Rietveld Schröder House : 1924年／撮影 : 2022年

2022年の現況写真。開閉状態の解釈は保存機関の動画と照合。

Olivermal / Wikimedia Commons · [CC BY-SA 4.0](#) · [元資料](#) ^[4]



図面・記録

Rietveld Schröder House ・ 可変平面模式図

建物 : 1924年／説明図 : 2017年

2017年作成の説明図。上階の仕切り開閉で位置関係が変わることを現況写真と照合する。1924年の原図ではない。

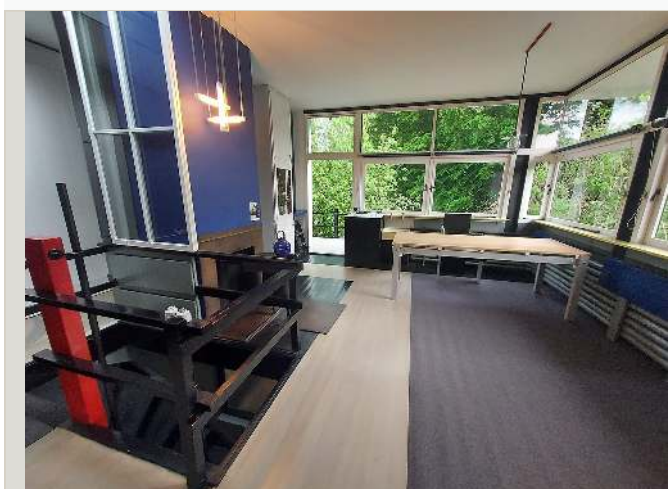
Jchancerel / Wikimedia Commons · [CC BY-SA 4.0](#) · [元資料](#) ^[5]

保存機関の説明で上階の可動間仕切りを確認してから写真を見る。単なる「開放的な平面」ではなく、家族が共に過ごす状態と個人の室を分ける状態を選べる点が要である。室内二枚は2022年の別角度であり、閉じる前と後の連続写真ではない。色の線が室の境界を強調する箇所と、壁が動いたときに境界が変わる箇所を分ける。ここへ保存機関の動画を加えると、一枚の静止画では見えない可変性が初めて分かる。可動壁の経路と閉じたときの室の輪郭は、保存機関の動画と平面で確かめる。^[1]

37 / 04

Truus Schröder-Schräderの要求を設計から消さない

家はRietveldの造形実験であると同時に、Truus Schröder-Schräderと子どもたちの暮らしの場である。上階を一室にまとめたり個室へ分けたりできることは、抽象的な白・黒・原色の遊びではなく、家族の居場所を使い分ける要請に結び付く。誰がいつ壁を閉じたか、開閉の音や手間、冬の環境がどうだったかは現在の内観と模式図では分からない。保存機関の歴史資料と居住者の記録を別に読む必要がある。設計者の名前だけで家族の判断を代表させない。^[1]



同一対象

同住宅・上階

Rietveld Schröder House : 1924年 / 撮影 : 2022年

可動壁のある階の現況。異なる撮影位置を改修前後としない。

Olivermal / Wikimedia Commons · CC BY-SA 4.0 · 元資料^[6]

37 / 05

抽象絵画との関係を一方向にしない

デ・ステイルの色と幾何が建築の見え方を説明する助けになるのは確かだが、家の可変性は抽象画を立体化しただけでは生まれない。小さな敷地、家族の暮らし、個室と共同の場の要求、1920年代の材料・建具の技術が関わる。色面が似るだけで画家の作品が直接の設計図だったとは言えない。外観を固定した図像として眺めるだけでなく、玄関から階段、上階へ進んだ時に視野がどう開閉するかを問う。原設計の図面と現況、保存修理の履歴は同じ時間の資料ではない。^{[1][2]}

外観の水平・垂直と色を見てから上階へ移ると、写真だけでは動く壁の意味がむしろ見えにくいことに気づく。開放された一室は一つの固定された間取りにも見える。公式の動画と平面を見れば、壁が開いた状態、閉じた状態を行き来する仕組みを確認できる。現在の二枚の内観を「前後」と誤認せず、撮影方向の差として表示することが重要である。1987年の外観写真も、1924年の創建時資料ではなく後世の保存状態を示す。色の抽象性と生活の可変性が両立したという説明は、図版のどこに動く部材があるかを指せて初めて成り立つ。[\[1\]](#)[\[2\]](#)

37 / 06

現在の保存された家から言える範囲

Rietveld Schröder Houseは現在、保存・公開される文化遺産であり、見学者の動きや撮影条件は当時の家族と異なる。写真で示せるのは開口の位置、色面、現在の家具と壁の状態。可動間仕切りが日常のどの時間に動いたか、室温や音への影響、家族ごとの使い方は一次証言と技術記録が要る。二枚の内観が似て見えても撮影位置が違えば壁の開閉を証明しない。図版のラベルに「上階・現在」「外観・現在」を明示し、保存機関の動画へ誘導する。固定した箱を疑うことは、生活の選択肢がどこまで設計に織り込まれたかを具体的に調べることになる。[\[1\]](#)[\[2\]](#)



同一対象

1987年の外観写真

Rietveld Schröder House : 1924年／撮影：1987年

2022年内観とは撮影時期が異なる。原設計時の姿ではない。

Bart Molendijk / Anefo / Wikimedia Commons · [CC0](#) · [元資料](#) [\[7\]](#)

この住宅はRietveldの造形実験であると同時に、Truus Schröder-Schräderと子どもたちの暮らしの場だった。設計者名一つで可動壁の原因を説明せず、住まう人が空間を切り替える要求を見に行く。外観の色面を絵画と比べるのは有益だが、壁を動かすと生じる視線、音、プライバシーは平面の抽象構成だけでは分からない。現在の保存された家は来訪者が歩く文化財であり、1924年の日常を再演する室ではない。見学用の設置や修理を経た部位の扱いは個別の保存記録を要する。現存性が高い建物ほど、現在の写真を無時間の原本として扱わない。[\[1\]](#)[\[2\]](#)

37 / 07

見学の家と暮らす家は異なる

1987年の外観写真と近年の室内写真を並べても、1924年の家族の一日を撮影した連続写真にはならない。保存された家は見学のための管理・修復・撮影規則を持ち、開閉できる建具でも来訪者が任意に動かせるとは限らない。抽象画を建築に拡張した、という説明だけなら色面は読めるが、動く壁によって変わる音、視線、家具の置き場は見落とす。平面で機構、写真で材料と位置、保存機関の動画で操作を分けて確かめる。色の似た別作品から直接の設計因果を推定しない。^[1]

模式平面の開いた状態と閉じた状態を見比べる際、変わるのは『広く感じるか』だけではない。個室の境界、階段からの見通し、家具を置ける壁面も変わる。模式図は操作位置の説明には便利だが、建具の重さ、遮音、開閉の時間は測れない。保存機関の動画を用いるなら、どの壁がどの方向へ動くかを止めて確認し、現在の操作映像を1924年の家族の習慣に置き換ええない。外観の白い面と色線を見た後、上階の間仕切りの動きへ戻ると、色彩と可変な室の関係を追える。^[1]

保存機関が公開する動画では壁を動かす順序が見られる。平面模式図では開・閉の最終状態は把握できても、人がどこに立って操作し、家具をどう避けるかまでは実測できない。上階写真で見える色線を模式図の壁の線へ対応させる時も、撮影方向を示してから比べる。現在の公開展示は当時の生活の再演ではない。^[1]

READING PRACTICE

一枚に戻って考える

上階の二枚の写真だけで壁が開閉した前後を証明できるか。何を追加して確かめるか。

考える手がかり：できない。撮影位置の差があるため、同じ位置での開閉記録、保存機関の動画と平面を照合する。

言える範囲

可動壁の開閉前後を同視点で見る写真はここにはない。模式平面と保存機関の動画から動きの経路を確認し、2022年の別角度の室内写真を開閉前後と取り違えない。

SOURCE REGISTER

出典・図版

[1] [Rietveld Schröder House, official site](https://www.rietveldschroederhuis.nl/en)

<https://www.rietveldschroederhuis.nl/en>

[2] [UNESCO, Rietveld Schröder House](https://whc.unesco.org/en/list/965/)

<https://whc.unesco.org/en/list/965/>

[3] [Andreas 2309 / Wikimedia Commons](https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Rietveld_schr%C3%B6der_house.jpg)

https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Rietveld_schr%C3%B6der_house.jpg

[4] [Olivermal / Wikimedia Commons](https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Rietveld_Schroeder_Huis_Utrecht_Interior.jpg)

https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Rietveld_Schroeder_Huis_Utrecht_Interior.jpg

[5] [Jchancerel / Wikimedia Commons](#)

<https://commons.wikimedia.org/wiki/File:RietveldSchroderPlans.png>

[6] [Olivermal / Wikimedia Commons](#)

https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Rietveld_Schroeder_Huis_Utrecht_Upper_Interior.jpg

[7] [Bart Molendijk / Anefo / Wikimedia Commons](#)

https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Exterieur_Rietveld_Schroderhuis_in_Utrecht%2C_Bestanddeelnr_933-9354.jpg

VOLUME 01 / PART IV / CHAPTER 38

なぜバウハウス は、工房・授 業・試作・建物 を結ぼうとした か

学校を「白い箱と鋼管椅子」の一様式で覚えな
い。授業で何を試し、工房で何を作り、都市と
産業へどう接続したかを、校舎の異なる翼と製
品から読む。

ドイツ・ヴァイマル／デッサウ、1919-1933年

実物・記録を見比べる

出典 8 件



▶ JensKunstfreund・校舎1926年建設／写真: 2025年・CC BY-SA 4.0 国
版情報

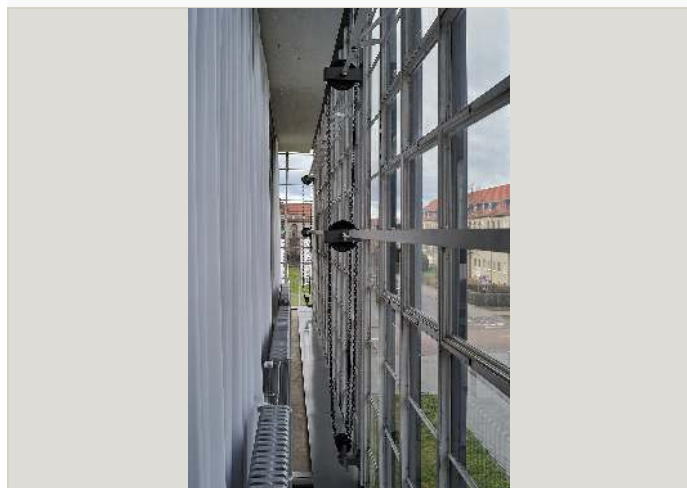
見える学校は単一の正面を持たない

デッサウ校舎の写真で、ガラスの工房翼、渡り廊下、教室の翼、学生の住居棟を一つずつ探す。財団の記録によれば建物は機能ごとに高さや大きさが異なり、歩き回って初めて全体が分かる。工房のガラス面は外から作業空間を見せるが、今日の透明な面を1926年当時の材料そのものと思っはいけない。戦災でガラス外壁は損傷し、後の修復にはアルミニウムとガラスが使われた。現在の写真は教育思想を示す手がかりであると同時に、保存史の写真でもある。窓の内側を写す画像と外観を並べ、同じ透過面が外部には制作を、内部には外の景色をもたらすことを確認する。^[1]

同じ写真の中で校舎の各翼を囲い、連絡廊下の下を市街の通行が抜けられる構成を確認する。デッサウの校舎を閉じたキャンパスと呼ぶと、この公共空間との接点が消える。住居棟の小さな窓と工房翼の大きなガラス面は、同じ「透明性」の表現ではない。用途ごとに採光と視線の条件が違うからだ。図面で翼を対応させると、校舎の造形が単一の美学でなく、授業、制作、居住、管理の配列によることがより確かになる。^[1]

一枚目と二枚目を対応させる

外観図では長い工房翼のガラス面をまず見つけ、その同じ面を室内写真で逆側から確認する。外で見える細い方立と内で見える床・天井の連続は、別の写真を同じ場所に結びつける手がかりになる。ここで「透明」は抽象的な標語ではなく、制作の部屋に入る光と、外から作業が見える可能性という二つの具体的条件を持つ。^{[1][2]}



同一対象

工房翼・内側

校舎1926年建設／写真: 2024年

ガラス面を内側から見る。現在の修復された建物の写真である。

Dirk Bindmann · CC BY-SA 4.0 · 元資料^[5]

ただしガラスの反射、日射、室温、作業者の視線は写真の画角と時刻により違う。現在のガラスは保存修復の後の姿で、1926年当時の性能値ではない。図版ごとに撮影年と被写体の建設年を別欄に置く。^{[1][2]}

授業の基礎と工房の実験

1919年の創設は美術学校と工芸学校の統合であり、初期の予備課程では色・形・材料を試した。Bauhaus-Archivの歴史授業資料は、造形を教える「形式のマイスター」と職人の「工房のマイスター」が並んで教えた時期を記す。カンディンスキーは形と色の授業に関わったが、学校の全製品の意匠を一人で決めたわけではない。学生の色彩演習、金属工房の照明、織物工房の布は同じ学校でも異なる課題の産物である。図版の校舎に添えた照明器具を「建築の細部」と混同せず、設計・試作・製造の別個体として見ると、教育が物になるまでに誰の技術が必要だったかが見えてくる。[\[3\]](#) [\[1\]](#)



同一対象

校舎内の講堂

校舎1926年建設／写真: 2000年

同じ Dessau 校舎の講堂。工房翼とは違う集会のための空間。

James Steakley · [CC BY-SA 4.0](#) · [元資料](#) [\[6\]](#)

教える場所と売るための品を同じ「作品」として扱う時は、作者名だけでなく協働の形も書く。工房の学生、技術を伝える職人、販売を担う会社、校舎を施工した人々が異なる立場に関わる。個人作家の代表作を並べる図鑑だけでは学校の仕組みを説明できない。教材には授業の課題、試作の現物、量産品、建物を異なる証拠として揃え、つながりを確認できないところは矢印を描かない。[\[3\]](#) [\[1\]](#)

製品写真と授業史の間にある段階

ブラントの照明とプロイヤーの椅子は、同じ学校を示す別個体である。照明の光源、金属の仕上げ、椅子の曲げ鋼管と座面の張りは図から観察できるが、両者の製造工程を同じと断定できない。Bauhaus-Archivの授業史を引いて授業の課題、工房の試作、企業による量産を三段階に分ける。「設計者の発想が工場へ直行した」という図式を避け、どの段階でマイスター、学生、職人、企業が責任を持ったかを製品ごとの個票に戻して確認する。図版は完成形を見せるだけで、失敗した試作や採用されなかった材料は写さない。[\[1\]](#) [\[2\]](#)



38 / 05

なぜ産業との接続へ向かったか

1923年の「芸術と技術の新しい統一」を経て、デッサウ期は産業的な量産を念頭に置く試作品へ重点を移した。これは直線や原色が流行したという表層の変化だけではない。ヴァイマルで保守・右翼勢力が州議会の多数となり予算が削られ、学校は1925年に工業都市デッサウへ移った。財団は、金属工房でのマリアンネ・ブラントらの照明設計と地域産業の協働、量産されたランプを記録する。試作が量産に達した事例と、芸術的実験のまま残った作品を同列に「機能主義の成功」と呼ばず、契約・製造・流通の段階を確かめる。建物と製品の二つの縮尺を重ねるのが、この章の比較である。^[2]^[1]



別個体・対照

ブロイヤーのワシリー・チェア

椅子設計1925-26年／写真: 2008年

2008年にデッサウ校舎で撮影されたブロイヤー設計の鋼管椅子。照明器具とは別の工房・製品で、授業から量産までの連続過程を一枚で証明しない。

Kai 'Oswald' Seidler from Berlin, Germany · [CC BY 2.0](#) · [元資料](#) ^[8]

「バウハウスらしい椅子」やランプを校舎の横へ置くと統一したブランド像を作りやすい。だが各製品は異なる工房、設計者、年の産物で、学校での試作と商品化の結果も異なる。写真に写る現在の復刻品を1920年代の量産実物と呼べない。資料に製作年と製造者がいない器具は、技術史の例証へ無理に使わない。学校の閉鎖も、単に趣味が古びた結果ではなく、ナチス政権下の政治的圧力と制度の変化に関わる。形式の受容と組織の存続を別々の年表で追う。 ^[2] ^[1]

鋼管椅子の写真を照明器具と比べると、部材を反復する方法は似て見える。しかし曲げた鋼管と金属工房の照明は設計者・工場・価格帯が異なる。二つを「機械的な見た目」で同族にせず、どの工房で何年に設計され、どの企業が製作・流通したかを製品ごとに追う。現在校舎に置かれた椅子は、授業当日の制作風景ではなく、後代の展示と保存の文脈を持つ。 ^[2] ^[1]

38 / 06

保存された学校を教材にする条件

現校舎の講堂写真には当時の教育空間を想像させる家具や色が見えるが、現在の展示・修復は学校運営中の実際の配置と同じではない。例えば校舎の壁色をカンディンスキーの講義の色彩理論の直接的な実施と説明してはいけない。建物の色彩計画、授業の担当、金属工房の製品史は異なる記録で追う必要がある。教材制作で「バウハウス」というラベルを付ける際は、一枚の意匠画像ではなく、学校が政治的圧力で移転し、製造業の地域に入った経緯まで読む。そうして初めて、椅子の形だけが組織の思想を代表するという短絡を防げる。 ^[1] ^[2]

38 / 07

写真が語らない学校の全体

現存校舎だけでは初期ヴァイマルの工房や1928年以降の校長交代、学生の選別を再現できない。デッサウ校舎の設計は、建築学科が1927年に設置される前に、グロピウスの私設事務所と協力者が担った。建物を「全員の共同制作」と簡略化すると、職務の違いと地域施工者の仕事が消える。カンディンスキーの色の演習を校舎の色面と一直線に結ぶこともできない。建物の色彩計画はヒンネルク・シェーパーの壁画工房によるもので、現在の色は資料調査に基づく修復だ。各図版の撮影年と製作年を見分けることから読み始める。[\[1\]](#)[\[3\]](#)

一つの校舎に学校の全歴史を代表させないため、年表を二列にする。左列にヴァイマルでの創設、デッサウへの移転、閉鎖と校長交代を置き、右列に予備課程、金属・織物工房、建築教育の制度を置く。見た目が似た製品が異なる年に作られたこと、同じ年でも教育目的が異なることが見える。さらに、校舎の現在写真には修復史の第三列を加える。建設時の材料、戦争による損傷、後の再建が混在するからである。作品を「バウハウス風」と呼ぶ前に、誰がどの授業・工房で作り、どの工場と関係したかを記録する。そうすればスタイルの暗記ではなく、学校という制度が技術と表現をどうつないだかを学べる。[\[1\]](#)[\[3\]](#)

四つの工房を一つの「バウハウス風」にまとめないという判断は、資料の並べ方にも現れる。校舎の外観、講堂の内装、プラントの器具、プロイヤーの椅子の順に並べ、各画像の下へ「建築」「現存室」「製品個体」「展示された椅子」と資料種を記す。椅子が校舎内で撮られたことは、その椅子が撮影時に授業で作られたことを意味しない。[\[1\]](#)[\[3\]](#)

READING PRACTICE

一枚に戻って考える

校舎の写真二枚と照明器具を見て、授業・工房・建物・産業のどの接点を各図が証明できるか分けよ。

考える手がかり：写真は現在の翼の構成と透過面、器具の形を示す。授業内容と量産の経緯は財団・教育アーカイブの記録で補い、写真だけで推定しない。

言える範囲

外観と室内は修復後の姿。学生個々の制作過程や使用者の評価はこの図版だけでは未詳。授業課題の原図と工房内制作過程は自由利用図版が未確保で、建物・完成品の写真から連続した制作工程は実証できない。

SOURCE REGISTER

出典・図版

[\[1\] Stiftung Bauhaus Dessau, Bauhaus Building](#)
<https://bauhaus-dessau.de/en/venues/bauhaus-building/>

[\[2\] Stiftung Bauhaus Dessau, Chronology](#)
<https://bauhaus-dessau.de/en/institution/chronology/>

[3] Bauhaus-Archiv, Unterricht am Bauhaus (歴史授業と工房)

<https://www.bauhaus.de/bauhaus1919/unterricht/>

[5] Dirk Bindmann

https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Dessau_Bauhaus_Werkstattf%C3%BCge_Fassade_innen.jpg

[7] Kai 'Oswald' Seidler from Berlin, Germany

https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Bauhaus_ceiling_lamp.jpg

[4] JensKunstfreund

https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Au%C3%9Fenansichten_des_Bauhaus-Geb%C3%A4udes_in_Dessau_01.jpg

[6] James Steakley

https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Bauhaus_Aula.jpg

[8] Kai 'Oswald' Seidler from Berlin, Germany

[https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Bauhaus_building_-_Wassily_Chairs_by_Marcel_Breuer_\(1925_26\)_\(3925088681\).jpg](https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Bauhaus_building_-_Wassily_Chairs_by_Marcel_Breuer_(1925_26)_(3925088681).jpg)

VOLUME 01 / PART IV / CHAPTER 39

なぜ近代建築 は、個人の住宅 から集合住宅と 都市の問題へ広 がったか

サヴォア邸、マルセイユのユニテ・ダビタシオン、チャンディガールの公共施設を、異なる依頼と制度の縮尺で読む。フランスの二作品は原資料へのリンクと抽象図で関係を示し、インドの実景で公共施設の違いを確かめる。

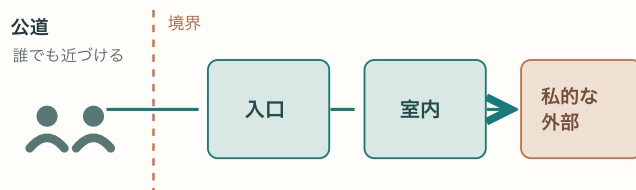
フランス・インドほか、1920–1960年代

実物・記録を見比べる

出典 13 件

01 個人住宅

利用者と通過できる範囲を分ける



関係の模式図。実際の平面・経路・寸法を再現しない。

▶ artbrane編集部・2026年制作・Original diagram, created for this volume 図版情報

個人住宅の動線を読む

財団のサヴォア邸資料と図版個票には、柱に支えられた白い量塊の写真がある。しかし外観写真一枚から、室内でどの順に階段やスロープを上り、屋上庭園へ出るかは分からない。UNESCOはこの住宅を「新しい建築の五原則」を示す代表例に挙げる。住宅の移動経験は現地の内部写真や設計図を重ねて初めて検討できる。室内を撮った別の個票は建築空間の資料であるが、その椅子が建設当初の生活配置だった証拠ではない。住宅を完成時の彫刻として見る場合と、施主の暮らしのための経路として見る場合では、必要な証拠が違う。写真の撮影年と展示・復元の有無をキャプションで確認する。[\[1\]](#)[\[2\]](#)

参照先の写真では白壁と屋上が見えるが、住宅の室温、雨仕舞、維持の負担はその美しい面から読めない。建築を「五原則の完成図」として受け取る前に、保全と修理の経緯も見たい。屋上へ上がる経路は身体の移動を演出する一方、階段や手すりの具体的な使いやすさは別問題となる。近代の革新を形式の突破だけで測らず、施主が暮らす住宅として何を不得何を負担したかを資料で照合する。現存の家具展示は当時の生活をそのまま写したものではない。[\[1\]](#)[\[2\]](#)

集合住宅で個室と共同を組む

マルセイユのユニテ・ダビタシオンでは、住宅一戸の工夫だけでなく、複数の住戸、共用廊下、屋上、サービスを結ぶ必要があった。UNESCOは個人と集団の均衡を探る住宅モデルとして位置づけ、標準化と大量供給を狙った試作とも述べる。財団資料と個票にある屋上と外壁の写真を対照すると、水平に連なる住居の面に、共同で使う高い場所が重なっているのが分かる。だが屋上の写真は、住人全員が同じように利用した証拠ではない。管理制度、所有・賃貸の区分、入居者の変化を調べて初めて「共同」の実際へ近づける。[\[1\]](#)[\[3\]](#)[\[2\]](#)

02 集合住宅

個別の住戸と共同の設備を重ねる



関係の模式図。実際の住戸数・平面・立面を再現しない。

図面・記録

集合住宅の住戸・共用部分／模式図

2026年制作

私的住戸、共用通路、共用屋上の階層だけを示す。ユニテ・ダビタシオンの平面・立面・住戸数の再現ではない。

artbrane編集部・Original diagram, created for this volume・[元資料](#) ^[3]

サヴォア邸を「近代」の標準例として扱う場合、ユニテとチャンディガールの資料を続けて読み、住宅一軒の形式がそのまま都市の正解になったという印象を修正する。形の反復より、要求の変化、施工の規模、管理の制度に注目する。 [\[1\]](#) [\[3\]](#) [\[2\]](#)

39 / 03

都市をめぐる政治と地域

UNESCOの17資産には、チャンディガールの首都施設群も含まれる。ここでの依頼は住宅ではなく、独立後インドの州都にふさわしい行政の場所を作ることだった。日射への応答として、日除け、二重屋根、雨水を扱う池などが記録される。同じ人物の作品という理由だけでフランスの住宅をインドへ拡大したと説明すれば、政策、現地の計画者、施工者、気候と使用者の差を消してしまう。都市の構想図は未来の提案であり、建ったもの・使われたものの実景と同じ証拠ではない。住宅、集合住宅、公共施設を「縮尺が違う問い」として比較する。 [\[1\]](#) [\[4\]](#) [\[3\]](#)



出典を確認

チャンディガールの書記局

2006年12月26日撮影

2006年撮影。州政府の書記局の長い外壁と日除けを伴う反復を見る。議会棟とは別の施設。

Lian Chang (diametrik) · [CC BY 2.0](#) · [元資料](#) ^[11]



出典を確認

パンジャーブ・ハリヤーナー高等裁判所

2017年2月24日撮影

2017年撮影。大きく張り出す屋根をもつ裁判所の外観。640pxの画像で細部の意匠や利用動線は判定しない。

Harvinder Chandigarh · [CC BY-SA 4.0](#) · [元資料](#) ^[12]



出典を確認

カピトルの「開いた手」

2016年9月4日撮影

2016年撮影。行政施設の室とは別に、州都の象徴として置かれたモニュメントを示す。敷地全体の配置図ではない。

Lillottama · [CC BY-SA 4.0](#) · [元資料](#) ^[13]

参照先にある集合住宅の外壁で水平に反復する窓から、住戸の生活が均一だったと推定しない。標準化は寸法と供給の仕組みに関わり、住む人の家族構成、装飾、手入れは変わる。チャンディガールの公共施設は一見同じコンクリートの語彙を使っても、政府の象徴として働く。戦後欧州の住宅不足と独立後のインドの行政の建設は別の政治課題だった。植民地支配の終わりと新都市建設の関係を省くと、作品を設計者の個人史へ吸収してしまう。 ^[11] ^[4] ^[3]

比較する三つの実作では、階段・廊下・広場のような移動の場所が、各制度で違う意味を持つ。私邸の屋上は限定された人の生活、集合住宅の屋上は共同利用、行政施設の広場は公的な表象となる。同じ「開かれた空間」という語で括らない。 ^[11] ^[4] ^[3]

書記局の長い立面、高等裁判所の張り出した屋根、議会棟、記念碑を同じ敷地の別個体として見る。四つの対象が示すのは行政、司法、立法、象徴という役割の分化であり、市全域の平面や動線を復元した図ではない。 ^[11] ^[4] ^[3]

39 / 04

議会棟の二図を同一施設として読む

チャンディガールの二枚は、同じ議会棟を2021年と2006年に異なる位置から写したものだ。片方で柱や大きな屋根の輪郭を確認し、もう片方で水面と広い外部の余地を見つける。二枚を足しても市全体のマスタープランや行政区域の境界にはならない。図に写る水は水盤の存在を示すが、年間の水管理、雨季の役割、維持費は写らない。サヴォア邸の私的な屋上庭園と同じ「水と外部」としてならべる際にも、行政施設の公共性や警備という制度が異なることを先に示す。 ^[11] ^[4]



別個体・対照

チャンディガール議会棟

議会棟1950年代／写真: 2021年

チャンディガールのCapitol Complexにある議会棟。2021年撮影。サヴォア邸・ユニテとは異なる施主・公共的使命・気候の下に建つ。

UnpetitproleX・CC BY-SA 4.0・元資料 [\[9\]](#)



同一対象

議会棟と前面の水面

議会棟1950年代／写真: 2006年

2006年撮影の同じ議会棟。大きな屋根、外部空間、水面の配置を別角度で見る。水盤の運用や入場規制は画像では不明。

duncid・CC BY-SA 2.0・元資料 [\[10\]](#)

39 / 05

三つの実物は縮尺だけでなく依頼が違う

サヴォア邸、ユニテ・ダビタシオン、チャンディガールの公共施設を「小・中・大」の模型のように置くと、同じ設計思想が単に拡大したという誤解を生む。個人住宅では施主の週末の使用、集合住宅では戦後の住戸供給と共用施設、州都では独立後の行政と象徴が設計条件になった。UNESCOの一つの世界遺産登録に含まれるからといって、依頼者、資金、維持の制度を同一視しない。原資料にある写真では柱・屋根・窓の共通語彙を指せるが、政治史の差は史料の表に置く。 [\[1\]](#) [\[2\]](#) [\[3\]](#) [\[4\]](#)

チャンディガール議会棟の二図は同じ庁舎を異なる年と角度で見せる。屋根の輪郭と水面の関係を一枚で見て、もう一枚で柱と外部の空間を確かめる。二図とも現存する公共建築の写真であり、独立直後に撮影された記録ではない。2021年の写真と2006年の写真で汚れや周辺施設が違って見えても、改修の有無を資料なしに断定しない。

[\[1\]](#) [\[2\]](#) [\[3\]](#) [\[4\]](#)

39 / 06

三縮尺で移動の場所を比較する

私邸には室内から屋上へ上がるスロープと限られた利用者、集合住宅には住戸から共有廊下と屋上へ移る関係、議会棟には広場から行政施設へ向かう関係がある。ただし模式図も掲載実景も三つの完全な平面図ではないため、経路の長さや所要時間を測る演習には使えない。読者は原資料の実景と掲載模式図を分け、入口の候補を仮に印付け、確定には現地図・館の案内・政府の利用規則が要ると記す。形式の共通性より、人がどこまで入れるかが制度ごとに変わることを比較の核とする。 [\[1\]](#) [\[2\]](#) [\[3\]](#) [\[4\]](#)

現在の写真と未完の計画を分ける

参照先のサヴォア邸とユニテの写真は撮影時の現況を捉え、UNESCOの文書は選定した作品群の価値判断を示す。後者は住民の満足度調査ではない。UNESCO自身がサヴォア邸の周囲に戦後建てられた施設や、ユニテの2012年火災と部分的再建にも触れる。従って「1930年代の理想がそのまま残る」とも書けない。CIAMの都市理念を個別建築の説明に使う場合は宣言や同時代の計画資料を別に読む。ここでは一設計者の一貫した造形より、独立した作品ごとに何が公共化され、何が失われるかを問う。[\[1\]](#) [\[2\]](#) [\[3\]](#)

三つの場所は同じ設計者の作品でも、施主が違う。個人住宅では暮らしと私的な動線、集合住宅では標準住戸と共用の管理、州都の施設では行政の象徴と都市の運営が問われた。参照先の外観写真だけを横に並べれば白い面、コンクリート、柱の共通性が目立つが、比較表に誰が依頼し、誰が維持し、誰が入れるかを加えると別の性格が現れる。UNESCOの登録はこれらを単一の「近代建築への貢献」としてまとめるが、登録の評価語も一つの制度の判断である。現地の使用者の声や改修の履歴で補えば、設計者の語彙を社会の受け取り方まで広げられる。資料がない項目は空欄にして、同じ形を同じ経験と見なさない。[\[1\]](#) [\[2\]](#) [\[3\]](#)

三つの建物の材料や造形が似ていても、施主が誰へ説明責任を負うかは違う。私邸の公開時の案内、集合住宅の住民の管理、行政施設の公的利用は、同じ「開放性」というラベルで測れない。写真の手前に人がいない時間帯を利用禁止の証拠とせず、図版に写る物理的余地と制度上の入場条件を分ける。[\[1\]](#) [\[2\]](#) [\[3\]](#)

READING PRACTICE

一枚に戻って考える

個人住宅・集合住宅の模式図で私的領域と共用領域を区別し、財団の実景写真へのリンクでその関係を確認めよ。掲載されたチャンディガールの議会棟・書記局・裁判所・記念碑から各施設の異なる役割を一つずつ挙げ、入場規則は写真から決められない箇所を示せ。

考える手がかり：二つの模式図は権利条件を踏まえた抽象化で、実際の平面ではない。フランスの実物形態は財団と写真個票で照合する。インドの写真は立法・行政・司法・象徴の別個体を示すが、利用資格・警備・管理は別の記録が要る。

言える範囲

サヴォア邸とユニテの写真は撮影者のCC表示があっても、フランスの建築作品自体の再掲条件を確認できないためリンク参照に限る。掲載した二枚の関係図は実際の平面・立面・寸法を再現しない。チャンディガールの五点の写真は別角度・別施設の実景であり、市全体の計画や利用規則を示さない。

SOURCE REGISTER

出典・図版

[1] UNESCO, Architectural Work of Le Corbusier

<https://whc.unesco.org/en/list/1321>

[3] Fondation Le Corbusier, Unité d'habitation Marseille

<https://www.fondationlecorbusier.fr/en/work-architecture/achievements-unite-dhabitation-marseille-france-1945-1952/>

[5] Jean-Pierre Dalbéra

<https://www.flickr.com/photos/dalbera/44084178102>

[7] Gatotienesueño

https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Cit%C3%A9_Radieuse_%C3%A0_Marseille.jpg

[9] UnpetitproleX

https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Palace_of_Assembly_Chandigarh.jpg

[11] Lian Chang (diametrik)

https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Chandigarh_Secretariat.jpg

[13] Lillottama

https://commons.wikimedia.org/wiki/File:The_Open_Hand_Monument,_Capitol_Complex,_Chandigarh.jpg

[2] Fondation Le Corbusier, Villa Savoye and gardener's lodge

<https://www.fondationlecorbusier.fr/en/work-architecture/achievements-villa-savoye-and-gardeners-lodge-poissy-france-1928-1931/>

[4] Fondation Le Corbusier, Chandigarh Capitol project

<https://www.fondationlecorbusier.fr/en/work-architecture/projects-capitol-chandigarh-india-1950-1965/>

[6] jeanbaptisteparis from Cambridge, MA, USA

[https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Villa_Savoye_\(8237925975\).jpg](https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Villa_Savoye_(8237925975).jpg)

[8] Anapuig

https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Unit%C3%A9_d%27Habitation_de_Marseille_4.JPG

[10] duncid

https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Palace_of_Assembly_Chandigarh_2006.jpg

[12] Harvinder Chandigarh

https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Punjab_and_Haryana_High_Court,_Chandigarh_Capitol_Complex,_World_Heritage_Site.jpg

VOLUME 01 / PART IV / CHAPTER 40

なぜ療養所は、 病室の光・色・ 椅子まで設計し たか

結核療養の場として、建物の方角、患者の姿勢、家具、室内色を連動させたパイミオ療養所を読む。身体のための設計を、治療効果の証明と混同しない。

フィンランド・パイミオ、1929年設計競技／1933年完成

実物・記録を見比べる

出典 7 件



▶ Leon Liao from Barcelona, España・療養所1933年完成／写真: 2011年
・CC BY 2.0 図版情報

病室を中心にした建物

パイミオ療養所は1929年の設計競技を経て1933年に完成した。アアルト財団は、用途ごとに分節した建物、コンクリート構造と設備、室内の小さな物までの計画を記録する。外観写真では長い棟と広い開口を読み、テラス写真では病室から屋外へ出て日光を受ける場所の存在を確かめる。ただし建物の写真だけで、全患者が同じ日照を得たとは言えない。方位、部屋の配置、当時の日課と医療方針は図面・記録を要する。今日のテラスは用途変更や保存の後に撮られた姿として見る。[\[1\]](#)[\[2\]](#)



同一対象

サンテラス

療養所1933年完成／写真: 2022年

同施設のテラス。光と屋外滞在の設計を示すが療法の効果は示さない。

Saandraaa · CC0 · [元資料](#) [\[5\]](#)

病室の窓、色、家具は患者が長く横になるという姿勢から読まれる。建物全景の幾何学だけを追うと、天井や洗面器の形を伏臥の視点で選ぶ意味が消える。設計者が患者の静けさを狙ったとき、それが療養の実際にどう作用したかは別の証拠を必要とする。室内写真で現在見える家具が原設計の部材か後補か、展示用に整えられているかも個別に調べる。病院として使われた時代と保存公開の時代は同じではない。[\[1\]](#)[\[2\]](#)

椅子二視点で見える身体の仮説

V&A所蔵のパイミオ椅子を正面と側面で見ると、背と座が一続きの曲面をなし、木の支持部から離れて弾むように見える。側面では着座した身体がどの角度に傾くかを仮説として描ける。ただし椅子の実寸、個人の体格、座り心地や呼吸の実測は画像にない。椅子が療養所と結びつけて設計されたという成立史と、V&Aに保存された個体であることを分けて記す。現存病室にこの個体が置かれていたというキャプションにはしない。[\[1\]](#)[\[2\]](#)



別個体・対照

パイミオ・アームチェア/V&A所蔵

療養所1933年完成／写真: 2026年

アアルト設計、1932-35年製作の曲げ積層バーチ材椅子。V&A所蔵個体を2026年撮影。療養所の現室に置かれた個体ではない。

14GTR・CC0・元資料 [\[6\]](#)



同一対象

同じ椅子の側面

椅子1932-35年製作／写真: 2026年

V&A所蔵の同一個体の別角度。背と座面の連続曲面、木の支持部と身体の傾きを観察する。呼吸改善の効果は画像から言えない。

14GTR・CC0・元資料 [\[7\]](#)

V&Aの椅子個票が示す1932-35年という年代を、療養所の1933年竣工と区別する。設計が建物の建設中に進み、製品個体が後に作られることはあり得るが、このV&A個体が患者に使われたと証明する資料はない。椅子の曲面は座る姿勢の設計を考える助けになるが、肺への効果は臨床資料を必要とする。 [\[1\]](#) [\[2\]](#)

40 / 03

色と照明の判断

財団の記録によれば、主階段の黄色い床、廊下の色壁、患者室の暗い天井、バルコニーの橙色の手すりは装飾家エイノ・カウリアと協働して計画された。室内写真を見るときは「アアルトの色」という総称にまとめず、患者が横になった視線、歩く職員の視線、方向を知る来訪者の視線を区別する。色の残存や再塗装については保存計画を照合する必要がある。画面で見える色は撮影条件と表示機器にも左右されるため、写真から色票の正確な値を測ったり、病気を治す色だと主張したりはできない。 [\[1\]](#) [\[2\]](#)



同一対象

療養所の室内

療養所1933年完成／写真: 2011年

同じ建物の内部実景。現在の保存状態を建設当時の使用と混同しない。

Leon Liao from Barcelona, España · [CC BY 2.0](#) · [元資料](#) ^[4]

家具の形は患者の寝た姿勢へ向けられた説明と対応するが、設計対象は患者だけではない。食事を運ぶ人、清掃する人、看護する人にも建物は使われる。彼らの経路が写真に写っていない場合、患者中心という標語で施設全体を代表しない。療養所の運営資料と職員の記録を探す課題として残す。^[1]^[2]

40 / 04

患者の姿勢と職員の作業を別図で問う

テラスで日を受ける患者、病室で横になる患者、廊下を歩く職員には違う高さや速度がある。財団の記録では、暗い天井は寝た視点でのまぶしさを和らげる意図、黄色い階段床は歩行中の視認性というように対象が違う。室内一枚に全ての色彩設計が写るわけではない。現在の写真の天井色を確定した当初色と呼ぶには保存記録と色層調査が必要だ。患者中心の設計が職員の労働を自動的に楽にしたとも言わず、動線の検討は別の平面図と運営史料へ送る。^[1]^[2]

40 / 05

椅子は病室のすべてではない

曲げ合板の「パイミオ・チェア」は療養所と強く結びつくが、財団は患者室の家具には鋼管のものも多かったと明記する。後に象徴となった椅子だけを示すと、複数の材料と衛生・清掃・製造の判断が見えなくなる。建物専用の家具と既製品が併用され、照明などは他所での利用も念頭に置かれた。外観・室内・家具の写真を一組にしつつ、それぞれ異なる個体、使用時期、複製品の可能性をキャプションで明示する。Aino AaltoとAlvar Aalto、装飾家、製造所の役割を「巨匠一人」の名で消さない。^[1]

サンテラスを「日光浴の効能」の成功例とすることにも注意がいる。施設が建った1930年代の結核治療観と、後の抗生物質による医療は変わった。建築の配置は当時の療法と衛生思想に応えたが、その医療的効果を写真から検証できない。国立文化財として保存する際は、元の素材、現代の安全、別用途の利用を調整する必要がある。外壁

の白さやテラスの爽やかさだけで「人にやさしい」と断じず、実際の病者、看護師、維持管理者の視点を残す。^[1]

同じ病棟でも病者は回復段階により姿勢や移動の自由度が異なる。設計の意図を評価する時は、横になった視点と歩く視点の両方の図を想像し、どちらも写真の一視点と同一視しない。記録が残らない利用者については推測を事実にししない。^[1]

40 / 06

医療思想の時間を重ねる

建設時、結核療養に光・空気・休息が重視されたことは、長い病棟やサンテラスの設計理由に関わる。後に薬物治療が変わり、施設の役割も変化した。今の写真に写る公開・保存の状態を、1933年の患者の毎日に直接重ねられない。建築史の問いは「治ったか」より、当時の病者の身体をどのように想定し、窓・色・家具の選択へ落とししたかを説明することである。治療効果は医療史の別の比較研究を必要とする。^{[1][2]}

患者用の椅子を側面から見た際、支持部と曲面の接点が少なく見えることは、木材の曲げ加工を観察する入口になる。ただし椅子の強度や座面の弾性は静止写真から測れない。建物のテラスが太陽に向けて広く開くのと、椅子が一人の身体を受けるのは異なる縮尺の判断である。いずれも1930年代の療養思想に接するが、医学的な効果を同じ資料で証明しない。^{[1][2]}

40 / 07

意図と効果を区別する

設計者は患者の身体と療養環境を強く意識した。しかし「静かな部屋が治癒を早めた」「この椅子が呼吸を改善した」という因果は、設計意図を述べるだけでは立証できない。治療法、入院期間、患者の背景を含む医療史の資料が必要になる。保存管理計画は建物の履歴を追うための一次資料であり、完成時の配置を現在の写真から補正する足場となる。図版を比較して答えられるのは、どの高さに窓・手すり・座具が置かれ、寝る・座る・歩く身体にどんな選択肢を与えたかまでである。^{[1][2]}

パイミオの病院を読む時は、建築家の言葉、保存機関の図面、元の患者や職員の経験という三つの証拠を区別する。Aalto Foundationの解説が示す患者中心の意図からは、窓や色、洗面器、家具の設計理由を説明できる。しかし患者の睡眠が改善したか、看護師の移動が楽になったかは、その意図だけで証明できない。写真のテラスに誰もいない時、療養の時間帯なのか保存公開中なのか不明だ。医療施設では病室から廊下、廊下から屋外へと移る身体の状態が日ごとに変わる。健全な見学者の一回の歩行を患者の体験に置き換えない。残された建物を見て当時の治療思想を読み、効能の判断は医療史料へ委ねる。^{[1][2]}

色と座具は視線と接触という異なる感覚へ働く。病室内の天井を寝た人が見る場合と、サンテラスを歩く人が見る場合は、同じ光でも当たる面が違う。写真の明るい白をそのまま衛生の成功と呼ぶと、病院を維持した職員の手入れや季節ごとの利用が消える。何を見たか、誰の身体を想定したか、効果を測ったかを分けて記す。^{[1][2]}

READING PRACTICE

一枚に戻って考える

療養所の外観・室内・テラスとV&Aのパイミオ椅子を、横臥・歩行・着座の三姿勢で読み分けよ。椅子写真から言える形と、患者への効果として言えないことを分けよ。

考える手がかり：窓、手すり、背座の曲面や傾斜は見える。V&A個体は療養所の元の配置ではなく、治療・呼吸・安楽の効果は写真では測定できない。

言える範囲

現況・過去写真・保存計画の時間差を保持する。実際の治療成績や患者の評価は未確認。

SOURCE REGISTER

出典・図版

[1] Alvar Aalto Foundation, Paimio Sanatorium https://www.alvaraalto.fi/en/architecture/paimio-sanatorium/	[2] Paimio Sanatorium Conservation Management Plan https://www.alvaraalto.fi/wp-content/uploads/2023/04/PaimioSanatoriumConservationManagementPlan.pdf
[3] Leon Liao from Barcelona, España https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Paimio_Sanatorium2.jpg	[4] Leon Liao from Barcelona, España https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Paimio_Sanatorium_interior.jpg
[5] Saandraaa https://commons.wikimedia.org/wiki/File:The_terrace_of_Paimio_Sanatorium.jpg	[6] 14GTR https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Paimio_armchair_by_Alvar_Aalto_01.jpg
[7] 14GTR https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Paimio_armchair_by_Alvar_Aalto_02.jpg	

VOLUME 01 / PART IV / CHAPTER 41

なぜ標準化した 台所は「誰が家 事をするか」を 含んでいたか

フランクフルト・キッチンを便利な台所の祖型として称賛するだけでは、戦後の住宅政策と、設計が想定した家事労働の担い手を見落とす。

ドイツ・フランクフルト、1926-1927年

実物・記録を見比べる

出典 8 件

▶ 14GTR・台所1926-27年設計／写真: 2025年・CC0 図版情報



狭い室内に仕事の順を畳む

MoMA所蔵の一個体と、V&Aで保存される別個体をまず分けて見る。引き出し、収納容器、折り畳める作業面、ガス調理器、回転椅子の位置から、調理、洗う、しまう動作の距離が短くなるよう配されたことが分かる。青い塗装やアルミ容器の印象だけで「近代的」と判断せず、どの道具を誰が何回持ち替えるかを図面に線で追う。MoMAは小麦粉容器に虫を避ける桎材、切る面に汚れに強いブナ材が使われたと記す。素材の選択も清掃と衛生に関わる。ただし美術館の展示個体は日々の食品や人がないため、実際の作業速度を見せない。^[1]

キッチンの狭さは欠点とも言えるが、図面と実物で作業の順序を見ずに評価しない。棚を引き出す、コンロへ移る、水場へ向くという往復を短くするのが設計課題だった。保存された一個体の写真で引き出しの深さや器具の位置を見られても、1920年代の住宅ごとの施工差は残る。博物館で開いた戸と、当時の日常で閉じていた戸を区別する。作業の合理化は誰の時間を測り、誰の労働を家の中に置き続けたかという社会史の問いを伴う。^[1]

V&A個体の複数視点で作業順をたどる

V&Aの全景で洗う、切る、火を使う位置をまず仮に点で結び、別角度で容器や棚がその経路のどこに置かれるかを確認する。手が届く位置は使用者の身長と姿勢で変わるため、写真上の見た目を標準的な身体の寸法に直さない。現存する台所は保存展示された個体であり、1920年代の共同住宅で料理中に撮られた場面ではない。写真の収納に何が入っていたかも展示時と居住時では違いうる。配置の観察と当時の働き方の推定は二段階に分ける。^{[1][2]}



別個体・対照

V&A個体の別角度

台所1926-27年設計／写真: 2025年

同じV&A個体の収納・作業面を別視点で比べる。

14GTR・CC0・元資料 ^[4]



同一対象

V&A台所の収納側

台所1926-27年設計／写真: 2025年

同一V&A個体を収納側から撮影。作業面と収納の近さを全景と対応する。

14GTR・CC0・元資料 ^[5]



同一対象

V&A台所の別細部

台所1926-27年設計／写真: 2025年

同一V&A個体の別細部。MoMA所蔵個体の証拠として扱わない。

14GTR・CC0・元資料 ^[6]



同一対象

金属容器の細部

台所1926-27年設計／写真: 2024年

V&A台所のアルミニウム容器。収納単位を別に撮影したもの。写真の収まりを当時の食品の配置と同一視しない。

14GTR・CC0・元資料 ^[7]



同一対象

V&A台所の長軸

台所1926-27年設計／写真: 2025年

同一V&A個体を長手方向に見る。洗う・準備する・収納する位置関係を全景と突き合わせる。

14GTR・CC0・元資料^[8]

容器の細部写真は、狭い室内に保存・調理の物を規格的な単位で収める考えを見せる。ただし今展示される容器が当初の同じ家庭で使われたセットかは、V&Aの個票と来歴の照合が要る。収納の数だけで必要な家事時間を見積もらない。台所が使われる時間の長さ、食材の種類、仕事を分ける家族がいたかは別の記録である。^{[1][2]}

41 / 03

都市住宅政策と科学的管理

第一次大戦後、ドイツの都市は住宅不足に直面した。エルンスト・マイの下でフランクフルトは住宅とインフラの新しい工法を試し、マルガレーテ・シュッテ＝リホツキーの台所が組み込まれた。MoMAは約一万件の台所が計画に含まれたと記す。設計者は工場の科学的管理を家事に応用し、主婦や女性団体への聞き取りと動作・時間の調査も行った。これは家事を担う女性の負担軽減を志向する一方、家事担当者を一人の女性と想定した制度と社会の反映でもある。「効率」の利点と役割の固定を同じ図面から問い、現代の多様な家族へそのまま正解を移さない。^[1]

建築家が台所を住宅計画に組み込む時、家庭内の無償労働をどう数えたかを読む。引き出しの多さや配列の整然さは合理化の意思を示すが、誰が何年使い、設備をどう修理したかは示さない。現在の展示室の観客が腰を曲げずに見られる高さは、当時の使用者の動作を再現する高さではない。^[1]

41 / 04

都市の住宅政策が台所を規格にした

フランクフルト・キッチン是一人の装飾家が一軒の好みで作った家具ではなく、都市の住宅建設と標準化の中で量産された。狭い住戸に独立した作業室を納めるには、作業面、収納、設備、窓の関係を寸法で決める必要がある。MoMAとV&Aの個票は、1926-27年の設計と保存個体の来歴を示すが、本章の写真はV&A個体だけだ。住宅政策の総数や原価をこの画像から数えず、制度資料へ戻す。生産数を示す場合は資料の年次と含む型の範囲を必ず書く。^{[1][2]}

保存個体と量産の差

V&A East Storehouseの複数視点は同じ保存個体の全体と細部であり、MoMAの個体とは別である。木の面の傷、容器の有無、取り外された設備は、現存品の来歴を調べてから原設計との差と呼ぶ。1920年代の印刷図版は計画された姿を示すが、すべての住宅が同一仕様だったと証明しない。三者を並べると、制度が求めた「反復可能な台所」と、一つずつの保存状態の違いが見える。寸法を比較するなら図面の縮尺か館の実測値に依拠し、写真の遠近から計算しない。^{[1][2]}

量産された台所は、家事を消す装置ではなく、家事を一人で効率よく行うという前提を形にした。住人が別の身長だったり、複数人で料理したり、子どもと過ごしたりすれば動線の評価は変わる。設計者シュッテ＝リホツキーの革新を認めることと、標準化がすべての家庭を代表したとすることは違う。写真の色も保存修復や展示照明で変わりうる。MoMA個体とV&A個体は同形式でも別物で、色・寸法・欠損の違いを「改良型」と断定しない。^{[1][2]}

この台所がどの住宅群で何戸施工されたかは、保存個体の写真では分からない。効率的な家事という設計者の説明は、自治体の住宅政策、家賃、設備の供給と結びついて初めて生活史になる。物の展示から制度の条件へ視野を広げる。^{[1][2]}

掲載した二図はV&A East Storehouseの同一個体である。MoMAの収蔵個体は設計史の別の一次記録として参照するが、この画面の中で二個体を形の違いとして比較することはできない。読み手はまずV&Aの収納、作業面、動ける余白を同一個体の全景と部分で対応させる。^{[1][2]}

効率という価値を誰の声で測るか

動線を短くすることは、家事負担を減らす願いと結びついた。しかし「効率」が何を節約し、誰にその節約を求めるかは政治的な問いでもある。台所を主に女性の仕事場とした社会の前提、家族の人数や食文化の違い、複数人で料理する時の狭さを検討する。保存個体には使用者の疲労や自由時間は残らない。設計者の意図と利用者の評価は別の証言であり、形が合理的に見えることを実測の時短効果として報告しない。^{[1][2]}

六枚のV&A写真は同じ保存個体の全景、長軸、収納、容器の細部として連結する。枚数が多くても六軒の台所ではない。MoMA個体や居住者の実家事については比較画像がないため、この章の図版を証拠にしない。これを明示してから、限られた面積に手の届く範囲を組むという設計意図を読む。^{[1][2]}

家事をした人の声は別に要る

作業距離の短さは模型・図面から推測できても、時間短縮の実測や使用者の満足度は別の調査資料を要する。小さな台所が複数人の調理にどう対応したか、子どもを見ながら働くことを助けたか妨げたかも、保存個体からは決まらない。MoMAの所蔵品はGinnheim-Höhenblick住宅団地由来の特定個体で、展示設営には保存・教育の判断が加わる。台所を「女性解放の完成形」や「抑圧の道具」のどちらか一語に閉じず、意図した負担軽減と、想定された役割・身体との間を読む。^[1]

保存されたキッチンを比べる時、MoMAの所蔵品記録は製作年、設計者、材料、寸法の手がかりとなる。V&Aで公開された別個体の写真は引き出しや作業面の構成を示すが、MoMA品の欠けた部分を直接埋める証拠ではない。二つを同型だから同一とみなさず、個体差がどこにあるかを写真の範囲で確認する。家事時間の短縮を説明するなら、誰が何分の作業を測定したかまで遡る。幅の狭さを労働者の解放と単純に結びつけば、家事の担い手を主に女性とした当時の制度や、家庭ごとの違いを消す。設計の新しさと、その前提が誰に合ったかを同時に問う。

[1]

READING PRACTICE

一枚に戻って考える

保存台所の全景と細部で、減らそうとした動作を三つ挙げ、どの身体・家族像が前提かを別欄に書け。

考える手がかり：容器や作業面の位置は持ち替え・歩数削減の意図を示す。設計時の想定はMoMA解説で確認し、実使用者の評価と分ける。

言える範囲

図版はV&Aの保存個体の六視点のみ。MoMA個体との差異、当時の家事労働の時間短縮、使い手の満足度は写真から測れない。二館の実物比較にはMoMA個体の権利確認済み画像が要る。

SOURCE REGISTER

出典・図版

[1] MoMA, Frankfurt Kitchen 83.2009 https://www.moma.org/collection/works/126451	[2] V&A, The Frankfurt Kitchen https://lookup.vam.ac.uk/east-storehouse/storagedisplays/USE2227/
[3] 14GTR https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Frankfurt_kitchen_at_V%26A_East_Storehouse_01.jpg	[4] 14GTR https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Frankfurt_kitchen_at_V%26A_East_Storehouse_03.jpg
[5] 14GTR https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Frankfurt_kitchen_at_V%26A_East_Storehouse_04.jpg	[6] 14GTR https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Frankfurt_kitchen_at_V%26A_East_Storehouse_05.jpg
[7] 14GTR https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Frankfurt_Kitchen_metal_containers,_V%26A_London.jpg	[8] 14GTR https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Long_view_Frankfurt_kitchen.jpg

VOLUME 01 / PART IV / CHAPTER 42

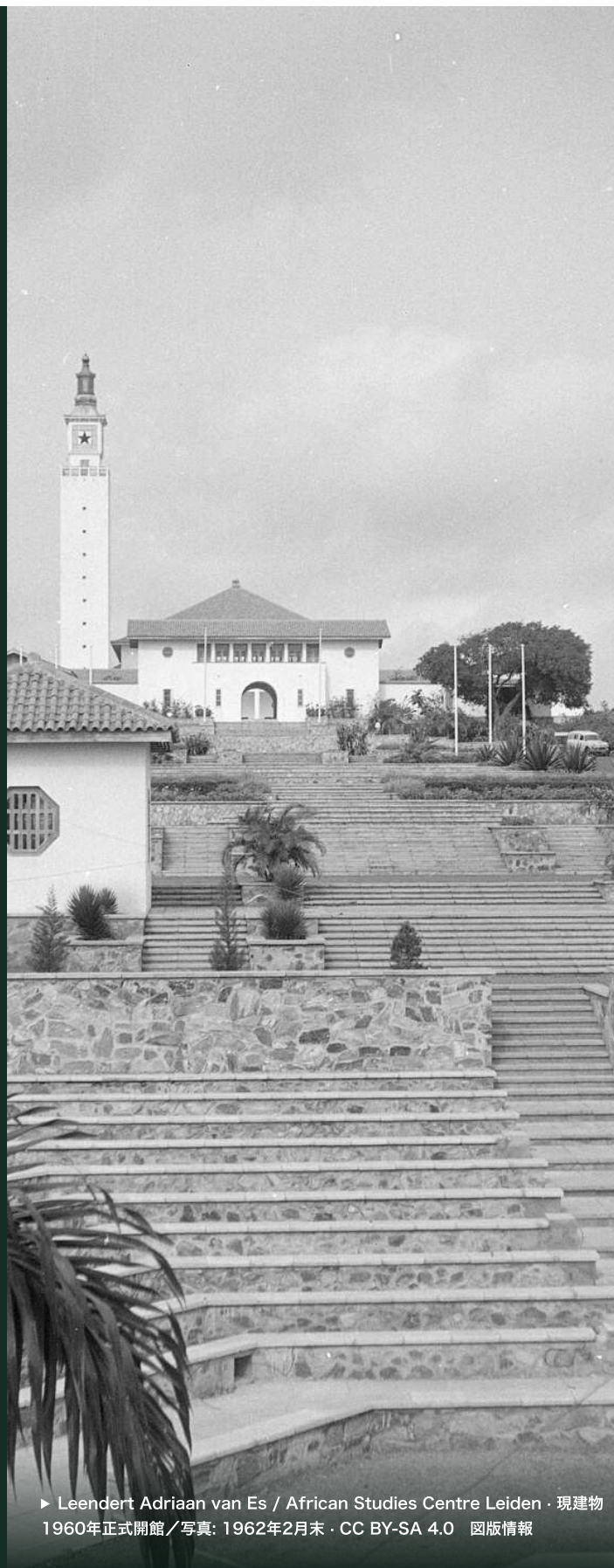
バルメ図書館は、 植民地期の創設 から独立後のレ ゴンへどう移っ たか

ガーナ大学のBalme Libraryは1948年に図書館として始まり、現在のレゴンの建物には1959年に移った。植民地期に構想された建物が独立後にどう使われ、何を収める場となったかを、1962年の写真、後年の外観、大学の記録に分けて読む。写真の外側にある運営や利用を、外形から捏造しない。

ガーナ・レゴン／大学図書館1948年創設・現建物1959年移転、1960年1月開館

実物・記録を見比べる

出典 12 件



▶ Leendert Adriaan van Es / African Studies Centre Leiden・現建物
1960年正式開館／写真: 1962年2月末・CC BY-SA 4.0 図版情報

独立の前後をまたいで建てられた図書館

ガーナ大学は1948年、英領ゴールドコーストのUniversity Collegeとして始まり、1957年のガーナ独立をまたいでレゴンのキャンパスを整えた。図書館は1948年にAchimotaで大学とともに始まった。1959年8月には約3000冊を新建物へ移し、1960年1月23日に正式開館した。大学の創設年と、この建物の使用開始・開館年は同じではない。Balme Libraryの現在写真では、赤茶の瓦屋根、白い壁、中央の時計塔、左右に広がる低い翼が見える。1950年代の設計を「独立後の民族様式」と呼ぶのは誤りである。建築史の現地調査は、大学計画を主導した建築家Austen Harrisonらの植民地期の仕事と、その後の利用者による転用・増築を分ける。建物の作者と現在の知の場を作る人は一致しない。まず1962年の写真で階段と塔、低い建物群を確かめ、2014年の正面写真で同じ輪郭と前庭の変化を見比べる。二枚の画角が異なるため、個々の柱や瓦が現存当初の材料かは確定しない。設計を「1957年の独立が建築形式を一挙に変えた」といった単純な前後関係に押し込まない。政治的独立、設計作業、蔵書の移送、利用開始、公式開館は異なる出来事である。[\[1\]](#) [\[3\]](#) [\[4\]](#) [\[5\]](#) [\[6\]](#)



同一対象

池越しの正面／2014年

現建物1960年正式開館／写真: 2014年2月22日

池と塔を正面から見る。1962年の階段越しの写真とは立ち位置が違う。

Enock4seth · [CC BY-SA 3.0](#) · [元資料](#) [\[9\]](#)

塔から入口へ、視点を近づける

1962年にLeendert Adriaan van Esが撮った写真は、広い階段の先にBalme Libraryの時計塔を置く。これは竣工時の図面でも当時の蔵書目録でもない。2014年の写真は正面の池越しに同じ塔を見せ、2007年の写真は入口のアーチへ近づく。広場、階段、入口という縮尺を行き来すると、大学の象徴として見える塔と、毎日利用者が通る入口を分けて読める。写真の人影や車から日々の来館者数を推算しない。1962年の塔が今日と同形に見えても、改修、塗装、樹木の成長を除外できない。入口の看板は2007年時点の案内で、1950年代の原意匠ではない。撮影者と年月が記された一枚を起点にすれば、後年の写真に共通する輪郭と変わった植栽を具体的に指せる。反対に、1962年以前の屋根材や外壁色をこの写真から遡って決めることはできない。[\[4\]](#) [\[3\]](#) [\[6\]](#)



同一対象

図書館入口／2007年

現建物1960年正式開館／写真: 2007年5月24日

入口のアーチと案内を近くから見る。看板は撮影時のもので、当初の意匠としない。

Michael Sean Gallagher · [CC BY-SA 2.0](#) · [元資料](#) ^[10]

42 / 03

屋根と中庭は外形以上の条件を持つ

2010年の中庭側写真では、塔のある正面とは違い、低い翼の窓と中庭を囲む回廊が目立つ。現地調査は、建物の初期計画が庭と屋外通路を含む格子状の配置をとり、後の増築でも中庭を増やしたと説明する。外観写真から風量や熱環境を数値化することはできないが、屋根の出、開口、内外の間にある歩行空間は観察できる。現地を訪れた研究者はAfricana Libraryで両側の扉から光と風が入る経験を記録した。この観察は2018年の特定の日・室に関する証言であり、1962年の全室の空調方式を示すものではない。写真、本人の観察、設計平面を別の証拠として置く。屋外の回廊や庇は図書館の一部分であり、机、棚、開閉可能な窓、換気設備の配置とは別に確かめる必要がある。中庭写真の人物の有無も、そこが読書や会話に使われた頻度の証拠にはならない。^[3]



同一対象

中庭側の翼／2010年

現建物1960年正式開館／写真: 2010年1月31日

低い翼と中庭を囲む外観。室内の蔵書や風量までは写らない。

Rjruiziii · [CC BY-SA 3.0](#) · [元資料](#) ^[1]

42 / 04

独立後に何を収めるかが変わった

大学資料によればAfricana Libraryは1961–62年に設けられ、アフリカの人文・社会科学に関する資料の収集と参照の場となった。1964年には学生向け参考図書の部門が西翼に加わった。時計塔の形だけでは、この収集方針や利用者の変化は見えない。植民地期に計画された室を、独立後の大学が何の知識へ割り当て直したかが、建築の歴史の一部である。2018年の現地調査は、稀覯書室や新しい増築、学生数と技術の変化に応じた改変を記す。ただし、研究者が訪れた室の現在を1960年代の全配置として復元しない。資料の収集・分類・アクセスには、建物写真と異なる制度史が要る。最初に約6400冊を備えたという大学内研究の記述は、後年の大規模な収蔵と比べる基点にはなるが、図版の棚数から検算できる値ではない。資料を集めること、目録を作ること、誰に閲覧を認めるかは、同じ室で起こっても異なる制度上の仕事である。 ^[2] ^[3] ^[5]

42 / 05

二つの写真は同じ建物でも同じ証拠ではない

2007年の入口写真はアーチと案内の尺度を、2025年の長い前庭写真は塔へ向かう歩行軸を示す。2014年の池越しの眺めも大学の象徴的な正面を見せるが、中庭で読書する人の居場所は写さない。三枚を「建物の全体」として一つに混ぜず、まず撮影者の立ち位置を略図に置き、見えない室を空白のまま残す。写真に写る樹木、舗装、池は撮影時点の外構である。戦後の大学設計図と同じ時代の姿として貼り合わせてはならない。前庭の見通しがよいことと、図書館の利用資格が開かれていることも別の問いである。撮影地点と年代を明記した比較は「以前と今のまったく同じ面」という証明ではない。後年写真の入口の形が似ていても、建具・看板・舗装・植物がいつ変わったかは修繕記録を要する。外観を過去の空間経験の代用品にしない。 ^[3] ^[4]



同一対象

前庭からの歩行軸／2025年

現建物1960年正式開館／写真: 2025年12月25日

広い前庭から塔へ向かう現況。2014年の池越し写真と同じ歩幅・地点ではない。

Cca Raheem · [CC BY 4.0](#) · [元資料](#) ^{[1][2]}

42 / 06

「熱帯近代」の一語に畳まない

白壁、赤い瓦、深い軒、横長の窓、塔を見て、一つの気候様式だと説明したくなる。現地調査はHarrisonの設計に、英国の植民地行政で形成された教育観や他地域での仕事が入り込んだことを示す。同時に後の大学側が建物を増やし、アフリカ研究の資料を集めることは、最初の計画者とは別の判断である。気候への応答は屋根の形だけで成立したのではなく、室の使い方、開け閉め、設備、維持の仕組みによって変わる。写真は形と日陰の手がかりを与えるが、設計の受容を測るアンケートではない。植民地期の「設計する側」と、独立後に実際に使い読み替えた側を一つの主語にしないことが、この章の核心である。インドのCharles CorreaによるBelapur Incremental Housingは、独立後の段階的住宅供給という別の課題を示す。設計者の財団には配置図・軸測図・現地写真がある。財団の説明では1983～86年のBelapurは、七戸が小さな共用中庭を囲み、各戸は自分の土地を持ち、共通の界壁を持たずに増築できる構想だった。建物を使い継ぐ方法の比較として、大学図書館の部門再編と、家族が住戸を段階的に拡張できる制度を分ける。一方、ここに載せた外観はBalme Libraryのみで、二国の実景を図版上で比べることはできない。原資料の住宅地図とガーナの公共図書館に、直接の影響関係や共通の「独立後様式」を作らない。^{[3][2][7]}

42 / 07

使い続ける人を次の調査に入れる

写真と大学の記録で、建物の形式と資料部門の変化までは追える。しかし図書館員の仕事、学生の座席の選択、障害のある利用者の移動、新しいデジタルサービスの場所を、この外観図だけから再現できない。必要なら現在の平面、増築の年表、利用者への聞き取りを追加する。古い建物が残っていることと、植民地期の教育制度がそのまま継続していることは同義ではない。逆に、使い方が変わったから原計画の影響が消えたとも言えない。外観の三時点を照合し、制度史と日常の記録を重ねることで、独立を一日の建築様式の切断として描かず、長い転用と選択の

歴史として読む。1959年8月の移送記録と1960年1月の公式開館を年表に書き分け、1962年写真の時点には既に利用された建物だったと位置づける。ここへBelapurの実景を追加する場合は、撮影者・撮影時点・改造済みかどうかを先に確かめ、配置図と暮らしの実測を混ぜない。[\[1\]](#)[\[3\]](#)[\[2\]](#)[\[6\]](#)[\[7\]](#)

READING PRACTICE

一枚に戻って考える

1962年の階段越しの写真、2007年の入口、2014年と2025年の正面・前庭を、撮影地点と資料種を記して並べよ。写真で確かめられる形の継続と、大学資料で初めて分かる収集方針の変化を二欄に分けよ。1948年創設、1959年8月移送、1960年1月23日開館を別行の年表に記せ。

考える手がかり：塔、低い翼、入口と歩行軸は写真で比較できる。1961–62年のAfricana Library設置や増築の理由は大学資料と現地調査の記述に依拠し、外観から推測しない。創設年を建物の竣工年と書かず、移送と公式開館を分ける。

言える範囲

掲載図はBalme Libraryの1962年・2007年・2010年・2014年・2025年の外観で、同じ撮影位置の前後写真ではない。設計図と室内の実景は示していないため、平面・性能・利用実態を外観から決定しない。Bolgatangaの別図書館やBelapur住宅地は原資料へ誘導する対照であり、この5図から視覚的に比較できない。

SOURCE REGISTER

出典・図版

[\[1\] University of Ghana, institutional history](#)
<https://old1.ug.edu.gh/about/overview>

[\[3\] Victoria Okoye, 2018 on-site account of Balme Library](#)
<https://africarchi.wordpress.com/2018/12/17/postcolonial-architectures-balme-library/>

[\[5\] University of Ghana thesis, Balme Library historical background \(1948年創設・1959年レゴン移転\)](#)
<https://ugspace.ug.edu.gh/bitstreams/d0839e9a-ab9c-4a2d-80c6-3eb0566cec44/download>

[\[2\] University of Ghana repository, Balme Library historical study \(Africana・参考図書部門\)](#)
<https://ugspace.ug.edu.gh/bitstreams/965a4304-c0db-4038-8894-4fa37754db78/download>

[\[4\] African Studies Centre Leiden, donated photograph collections](#)
<https://www.ascleiden.nl/content/photographs>

[\[6\] University of Ghana thesis, Lending Services in Academic Libraries \(1959年8月移送・1960年1月23日開館\)](#)
<https://ugspace.ug.edu.gh/bitstreams/b1681bd4-d26c-4f77-8ad2-a9b2604ca0e1/download>

[7] [Charles Correa Foundation, Belapur Incremental Housing](#)

<https://charlescorreafoundation.org/2022/03/13/incremental-housing/>

[9] [Enock4seth](#)

https://commons.wikimedia.org/wiki/File:The_Balme_Library_Legon_2.jpg

[11] [Rjruiiziii](#)

https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Balme_Library_of_University_of_Ghana_Accra_Ghana.jpg

[8] [Leendert Adriaan van Es / African Studies Centre Leiden](#)

https://commons.wikimedia.org/wiki/File:ASC_Leiden_-_NSAG_-_van_Es_17-001_-_The_Balme_Library_with_its_tall_tower_and_clock_-_University_of_Ghana_Accra-_late_February_1962.tiff

[10] [Michael Sean Gallagher](#)

https://commons.wikimedia.org/wiki/File:UoG_Balme-Library_2007.jpg

[12] [Cca Raheem](#)

https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Balme_Library_1.jpg

VOLUME 01 / PART IV / CHAPTER 43

なぜ戦後の住宅 は、規格部材を 場所に合わせて 組み替えたか

イームズ邸を一枚のファサード写真で「工業化された住宅」と呼ばない。既製の部材を使いながら敷地と生活に応じて計画を変えた履歴を読む。

米国・ロサンゼルス、1945年原案／1949年竣工

実物・記録を見比べる

出典 8 件



▶ Gunnar Klack・住宅1949年竣工／写真: 2014年・CC BY-SA 4.0 図版情報

外観の格子は何を示すか

Case Study House #8の外壁には鋼の格子と異なる色・透明度のパネルが見える。現在の外観写真からは、既製材を使って開口と壁を組み立てたこと、住宅と仕事場が並ぶことを観察できる。室内写真は展示された生活用品や造り付けと可動家具の関係を示すが、1949年の入居直後そのままとは限らない。イームズ財団は現在の保存と見学も担うため、写真は生活記録であると同時に保存・展示の記録である。まず三枚を同じ敷地の違う面として地図上に置き、色面だけをモンドリアンの絵画に似せて語る近道を避ける。^[1]

外観を正面から見ると、パネルの色と金属の規則的なグリッドが際立つ。内部からは同じ枠が樹木と生活用品を区切る窓になる。Eames Foundationは、設計の変更時に既に調達していた鋼材を使い、敷地の斜面と草地を守る位置へ建物を置いたと記す。写真が示す軽やかな立面は、建築材料の供給遅延と現場の地形を選び直した結果でもある。最初のBridge House構想と竣工建物の図版を並べれば、単なる形の修正でなく敷地との関係の変更が分かる。^[1]

現在の写真に家の格子が反復して見えても、1945年原案で想定した鋼材がそのまま同じ場所に使われた証拠ではない。形の共通性は完成案の観察、調達と設計変更はEames Officeの記録、生活用品の配置は保存された室内の別の時間層として三列にする。これによって「工業部品を使った住宅」が直ちに量産住宅の実績を意味しないと確認できる。^[1]

格子の反復を敷地の中で見る

外観を複数の角度から追うと、細い鋼材の格子に異なる色・透過性のパネルがはまり、同時に家が斜面とユーカリの列に沿って置かれていることがわかる。格子は規格化された部材を使う意図を示すが、周囲の樹木まで規格化したわけではない。外観の隣に室内を置き、窓の外の色と内部の生活用品を対応させる。家全体をどこへでも運べるキットと呼ばず、この敷地で何を残したかを確かめる。^{[1][2]}



同一対象

イームズ・ハウス別外観

住宅1949年竣工／写真: 2014年

同じ家の別角度。外壁のグリッドと周囲の樹木を比べる。

Gunnar Klack · [CC BY-SA 4.0](#) · [元資料](#) ^[6]



同一対象

イームズ・ハウスの別外観

住宅1949年竣工／写真: 2012年

現存するCase Study House No.8を別の位置から撮影。反復する枠と斜面・樹木の関係を見る。1945年原案図ではない。

Kyle · [CC BY 2.0](#) · [元資料](#) ^[7]



同一対象

樹木の間から見た住宅・仕事場

住宅1949年完成／写真: 2014年5月12日

上方から見た2014年の現況。樹冠が建物の一部を隠し、原案の平面や全敷地を示さない。

edward stojakovic · [CC BY 2.0](#) · [元資料](#) ^[8]

上方からの第五図は建物の輪郭より樹木の密度を強く示す。見えない床面を図面で補う際は、1945年原案と1949年完成案を分ける。 ^[1] ^[2]

43 / 03

1945年の原案と1949年の変更

イームズ財団によれば、1945年にCharles EamesとEero Saarinenが「Bridge House」を設計し、工業製品のカタログから部材を発注した。戦争後の資材不足で鋼材到着が遅れる間に、CharlesとRay Eamesは草地を残す構成へ考え直した。同じ部材を使い、一部の鋼材を追加して二層の住宅と別棟スタジオへ組み替えた。つまり「規格」は形を機械的に決める制約だけではなく、場所へ調整する余地も持った。原案と完成形の図は同財団に掲載されるが、ここに再掲するなら個別の画像使用条件を確認する。現況写真だけを見て設計変更を読み取ったとは書かない。 ^[1]

工業化をめざす試作住宅という語は、規格材を使うことと、多くの人が同じ家を得られることの間に距離があると教える。Eames Houseを住宅供給政策の達成例と呼ばない。広い普及を語る時は建材の価格、敷地、施工の仕組みを確認する。 ^[1]

1945年の橋状の原案と1949年の完成案は、Eames Officeの歴史叙述で比較する。ここに掲載した現在写真は完成した住宅だけであり、原案を写していない。原案との差を写真内の「見えない形」として色分けせず、文書で確認した設計変更として年表に置く。 ^[1]

43 / 04

1945案と完成案は別の媒体で確認する

Eames Officeの歴史記録は、1945年のBridge House案が敷地を橋のようにまたぐ案で、戦後の鋼材供給の遅れの間に計画が組み替えられたことを説明する。1949年の完成家の写真は、その後の結果だけを見せる。二案を比較するには原案図をリンク先で読み、掲載図版には「原案」と誤ラベルを付けない。変更の理由を美意識の変化だけに帰さず、調達、敷地の使い方、RayとCharlesの協働を分けて記録する。[\[1\]](#)[\[2\]](#)

43 / 05

住宅の実験は量産の達成ではない

Arts & Architecture誌のCase Study House計画は、戦後の生活に応じる住宅を材料・技術から考える実験だった。#8は実際にCharlesとRayの住居兼仕事場となったが、個別の敷地、二人の仕事、収集品で育った一軒である。イームズ・オフィス自身も、この住宅は量産住宅にはならず、一点ものにとどまったと記す。部品化への志向、現地での施工、住み方の可変性を、それぞれ別の達成として評価する。次章のKnoll Planning Unitの企業オフィスは「変えられる職場」という関連する問いを持つが、発注者、収益構造、勤務者の数が異なるため一つの空間類型としてまとめない。[\[1\]](#)[\[2\]](#)[\[3\]](#)

住居とスタジオが並ぶ構成は、暮らしと制作を分けながら行き来させる。室内に並ぶ集めた物、民芸、試作、家具を全部「イームズのデザイン」と呼ばず、誰が作り、どこから来たかを確認する。今日の保存写真は住まいとして使った長い時間を伝えるが、1949年の完成時を一瞬で復元しない。ケース・スタディ・ハウスの大量生産の理念も、この住宅そのものが量産されたという意味ではない。一回限りの実作と、広く応用できる構法の提案を分ける。[\[1\]](#)[\[2\]](#)[\[3\]](#)

43 / 06

住宅内の物は規格化の反対側の証拠

室内には家具や収集物があり、住宅が単なる工業部材の見本ではなく、長く住みながら物を選び直す場所だったことを示す。ただし今日の保存された室内は、1949年の入居当日の配置ではない。製造業と住宅をつなぐ試みが、実際に低価格住宅を大量供給した成功例だと写真から断定しない。展示や保存に残った唯一の家と、雑誌で提案された戦後住宅の社会的目標は分けて扱う。[\[1\]](#)[\[2\]](#)



同一対象

イームズ・ハウス室内

住宅1949年竣工／写真: 2014年

同じ家の生活用品と窓を見る。1949年竣工時の室内記録ではない。

edward stojakovic · [CC BY 2.0](#) · [元資料](#) ^[5]

43 / 07

誰が使い、誰が設計したか

Case Study Houseの紹介ではCharlesとRayの共同の生活・制作に焦点が当たる。一方、初期案にEero Saarinenが関わった事実を落とすと、完成形までの判断過程が消える。室内の物も全てが二人の設計品ではなく、収集・贈与・移動の履歴を持つ。写真の格子に家具の形を無理に従属させず、工業部材の反復の中に異種の物が入る緊張を見る。生活空間の写真から他の戦後家庭の標準像を導くことはできない。建物を使う人の固有性と、反復可能な部材を同じフレームに収めたところに、この住宅の学習価値がある。^[1]

住宅は展示されると、よく整えられた室内の一瞬に見える。Eames Houseでは、CharlesとRayが長く暮らし、物を集め、制作を続けた時間を写真から消さない。Eames Foundationの歴史説明には、設計が一度で決まらず、鋼材の調達と敷地の再考によって変わった経緯がある。最初の案と竣工後を図面で比較すれば、規格材の使い方と建物の地面への置き方を別々に説明できる。内部写真にある品を生活の痕跡として読む際も、来歴が不明な工芸品を家の設計者の作品にしない。モジュール化は物を無個性にするというより、生活の変化を受け入れる骨組みを作る可能性を示した。ただし量産の実績は別の資料で確かめる。^[1]

Eames Houseの保存写真で室内の物を数える時、収集物がいつ置かれたかは個別に確かめる。生活の時間はパネルの規格と違い、同じ位置に留まらないからだ。Case Study Houseの建築年1949年と写真の撮影年を並べ、窓の外の樹木や内部の品が後に変化した可能性を残す。^[1]

READING PRACTICE

一枚に戻って考える

完成したEames Houseの外・内実景で反復する部材とこの敷地固有の条件を分け、1945年原案との差はEames Officeの文書からのみ二点補え。

考える手がかり：写真は完成住宅の格子、パネル、周辺樹木を示す。1945年原案の形、鋼材の調達遅延、1949年の設計変更はEames Officeの文書に依拠する。

言える範囲

掲載図は1949年完成のEames Houseの現況を示す。1945年のBridge House原案の形や、その案からの具体的な変更は、これらの現況写真では比較できない。

SOURCE REGISTER

出典・図版

[1] [Eames Foundation, Case Study House #8](https://eamesfoundation.org/work/case-study-house-8/)
<https://eamesfoundation.org/work/case-study-house-8/>

[3] www.knoll.com
<https://www.knoll.com/story/shop/the-planning-unit>

[5] [edward stojakovic](https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Eames_House_Interior.jpg)
https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Eames_House_Interior.jpg

[7] [Kyle](https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Case_Study_House_8_(Eames_House)__(49841751998).jpg)
[https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Case_Study_House_8_\(Eames_House\)__\(49841751998\).jpg](https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Case_Study_House_8_(Eames_House)__(49841751998).jpg)

[2] [Eames Office, The Modular House](https://www.eamesoffice.com/modular-house/)
<https://www.eamesoffice.com/modular-house/>

[4] [Gunnar Klack](https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Eames-House-Case-Study-House-No-8-Pacific-Palisades-California-04-2014b.jpg)
<https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Eames-House-Case-Study-House-No-8-Pacific-Palisades-California-04-2014b.jpg>

[6] [Gunnar Klack](https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Eames-House-Case-Study-House-No-8-Pacific-Palisades-California-04-2014d.jpg)
<https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Eames-House-Case-Study-House-No-8-Pacific-Palisades-California-04-2014d.jpg>

[8] [edward stojakovic](https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Eames_House_from_above_(14205168324).jpg)
[https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Eames_House_from_above_\(14205168324\).jpg](https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Eames_House_from_above_(14205168324).jpg)

VOLUME 01 / PART IV / CHAPTER 44

なぜ室内装飾家は クラブの部屋 ごとに異なる表 情をつくったか

初代Colony Clubの現建物と、Elsie de Wolfeが1913年に出版した食堂・寝室・Trellis Roomを見比べる。現在の階段ホールと当時の室内を同時点の復元とせず、用途別の内装とその出版のされ方を読む。

米国・ニューヨーク、Colony Club 1900年代／1913年刊行の室内写真

実物・記録を見比べる

出典 6 件



▶ Elsie de Wolfe, *The House in Good Taste* (1913)・Colony Club室内
1913年刊行／写真: 撮影年未確認・Public domain (1913 publication; US)
図版情報

クラブの部屋に誰が入ったか

de Wolfeが手がけたColony Clubは、当時の上層女性の社交のための私的施設だった。Cooper Hewittは彼女がクラブの室内を担い、別の芸術家Robert Winthrop Chanlerの壁画と協働した経緯を記す。『The House in Good Taste』の当時の写真にある食堂や寝室は、家具、壁面、布、明るさを一室の経験として設計したことを示す。しかし会員のための空間であることは、女性一般が自由に使えた公共施設だという意味ではない。歴史写真は設計者が選んだ見せ方も含む。現在の建物外観を部屋の使用風景と混同せず、写真の時代を分ける。[\[1\]](#) [\[4\]](#)



同一対象

旧クラブ建物・現在の階段ホール

初代建物1904-08年／写真: 2016年7月12日

初代Colony Clubの旧建物に残る階段ホールを2016年に撮影した内部実景。1913年の食堂・寝室・Trellis Roomの原配置を示さない。

Elisa.rolle · [CC BY-SA 4.0](#) · [元資料](#) [\[5\]](#)



同一対象

初代Colony Clubの旧建物・現外観

初代建物1904-08年／写真: 2012年8月14日

120 Madison Avenueの初代クラブ建物。現在はAmerican Academy of Dramatic Artsが使用。de Wolfeの1913年室内写真と時点を混ぜない。

Beyond My Ken · [CC BY-SA 4.0](#) · [元資料](#) [\[6\]](#)

1913年刊のde Wolfeの著書にはColony Clubの食堂、寝室、Trellis Roomの実際の室内写真が載る。現在のクラブ外観とこれらを並べれば、外からは見えない壁紙、家具、格子、照明の選択が現れる。同一施設の室を別角度で見比べると「女性のクラブ」という社会制度が、食事、宿泊、談話の複数の行為に分けて空間化されたことが分かる。ただし本は本人による編集・宣伝でもあり、全会員や従業員の経験を代表しない。どの部屋が誰に開かれ、誰が掃除したかは別の記録が要る。[\[1\]](#) [\[4\]](#)

Colony Clubは会員のための場所で、写真に写る静かな部屋だけでは利用の規則を示せない。誰が会員として食堂に入れ、誰が給仕や清掃に従事したかを同じ「女性の空間」という語へ漬さない。de Wolfeの仕事は室内の選択を伴うが、建物の全構造を一人で設計したと書かない。外観写真は都市との接点、三室の写真は内部の用途を示し、それぞれ異なる問いを支える。[\[1\]](#) [\[4\]](#)

掲載した階段ホールは2016年の現況であり、de Wolfeの1913年刊行写真と同時の状態を示さない。外観は現在の旧建物を示し、当時の室内の配置は原著三図に限って読む。[\[1\]](#) [\[4\]](#)

三室で違う活動を特定する

食堂には複数人の席と配膳が要り、寝室には休息と身支度が要る。Trellis Roomでは格子状の面が背景を作り、利用者を囲む。de Wolfeの本に載った写真を、単に装飾柄の違いとして見ず、家具が動く余地、座った時に見える壁、入口から最初に見える面を各室で指す。モノクロ写真で色の比較をせず、素材と光沢の印象も印刷技術の影響を考える。室内写真三枚は同じ施設の違う用途という、比較の条件が揃った組である。[\[1\]](#) [\[2\]](#) [\[4\]](#)

de Wolfeの本は、彼女がColony Clubの格子の室を計画した際、細い緑の木片を交差させる作業の重要性を理解する職人を探すのに苦労したと語る。格子面は単に印刷された模様ではなく、木片を施工して壁の装飾にした仕事である。写真で反復する縦横を指した後、その均一さを誰の手が作ったかを本文へ戻す。職人の固有名は原著に見当たらないため、勝手に補わない。[\[1\]](#) [\[2\]](#) [\[4\]](#)

44 / 03

装飾家の仕事は一人の手ではない

de Wolfeの名で語られる室内には、建築家、壁画家、家具・布の製作者、施工者、依頼主の選好がある。Cooper Hewittが紹介する第二のColony ClubではChanlerの鳥や花の壁画が部屋を形づくった。de Wolfeの著書に載る写真は自身の考えの一次資料である一方、掲載されない部屋や使用上の不満を教えない。室内全体を決める権限の広さと、制作を分担する多数の手を同時に読む。別の自宅や別荘の写真をColony Clubの部屋として流用せず、作品の場所をキャプションで正確に示す。[\[2\]](#) [\[4\]](#)

44 / 04

女性のクラブという依頼の制度

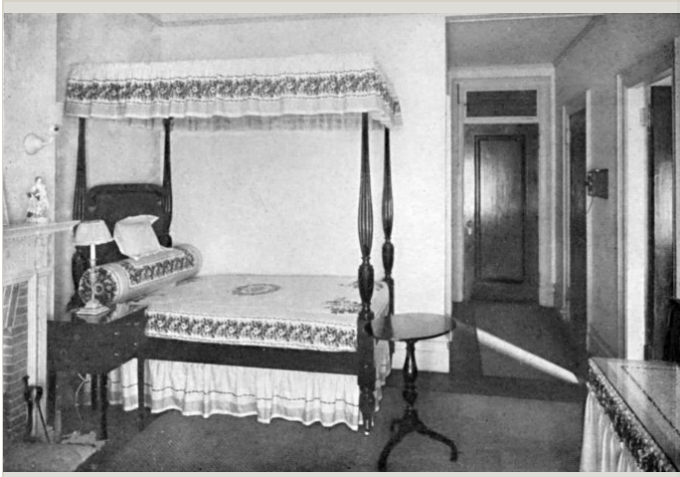
Colony Clubが女性の社交のために設けられたことは、室の数と利用の仕方に関わる。誰が会員となれ、誰がその場で働いたかを区別しなければ、女性のための公共的空間という一つの語で階級と雇用の差を消す。de Wolfeの仕事の説明する時も、依頼者、建築家、家具製作者、室内装飾家の役割を分ける。2012年の外観は都市に面した入口の現存位置を示すが、入会の規則は示さない。写真の人物不在を、利用者や労働者がいなかった証拠にしない。[\[1\]](#) [\[2\]](#) [\[4\]](#)

原著の目次を見ると、壁、色、扉と窓、人工照明、階段、食堂、寝室、格子などの章が分かれる。室内装飾を最後の飾り付けだけに限定していないことが著書の構成からわかる。同時に原著は「女性が家をつくる」という当時の階級的・性別役割の前提で語り、働く人々の声を十分に残していない。図版と文を合わせて読み、記録したい人と記録されなかった人の差を教材の問いにする。[\[1\]](#) [\[2\]](#) [\[4\]](#)

44 / 05

私的食堂、寝室、格子の室を比べる

de Wolfeの1913年の著書に載る三室は、同じColony Clubでありながら用途が違う。食堂では卓と椅子の配置が会話と給仕の距離を決め、寝室では就寝と身支度の道具、格子の室では壁面全体の構成が前面に出る。三枚を「女性的な趣味」といった一語で括らず、誰がそこで何をするか、どの面を背景にし、どの家具が動くかを一枚ごとに記述する。外観写真は施設の入口と都市との接点を示すが、室内の装飾を証明しない。照明や色はモノクロ印刷で失われるため、著書の語りをそのまま実景の完全な再現にしない。[\[4\]](#) [\[1\]](#)



同一対象

Colony Club寝室

Colony Club室内1913年刊行／写真: 撮影年未確認

同じクラブの別室。食堂とは用途が異なる。

Elsie de Wolfe, The House in Good Taste (1913) · [Public domain \(1913 publication; US\)](#) · [元資料](#) ^[4]



同一対象

Colony Club格子の室

Colony Club室内1913年刊行／写真: 撮影年未確認

同じクラブのTrellis Room。装飾を室の用途と結びつけて読む。

Elsie de Wolfe, The House in Good Taste (1913) · [Public domain \(1913 publication; US\)](#) · [元資料](#) ^[4]

44 / 06

原著の写真は自己表現でもある

1913年の『The House in Good Taste』は、de Wolfeがどの室を自作として見せたいか選んだ出版物である。写真は有力な一次史料だが、すべての室、使い古した状態、維持の手間を網羅しない。原著中の説明と撮影された位置を対応させれば、装飾を「一人の趣味」から、依頼・撮影・出版を通した専門職の提示へ広げられる。Knoll Planning Unitは別の時代の職能を考える参照先として残すが、本章の図版にない事例を見たことにしない。^[1]^[2]

食堂の写真で卓のまわりの席を読み、寝室ではベッドと歩ける余地、格子の室では壁と天井を覆う部材の連続を読む。これは同じクラブ内でも、活動に応じて視線の中心が変わることを示す。三室を撮った日や、同じ会員がどれほど使ったかは明らかでない。写真の美しさを「利用の成功」と呼ばず、配置の判断までに止める。^[1]^[2]

44 / 07

依頼と写真の選択を読む

Colony Clubは女性のための社会的施設であり、その室内を誰が使い、誰が撮影を許したかという制度も画面の成立条件である。de Wolfeの著書は設計者自身が自作を提示する媒体で、労働に関わった職人や給仕の視点を等しく写す資料ではない。同時代の室内を比較するときは、依頼者、装飾家、建設・製作に携わった人、利用者を分ける。後のKnoll Planning Unitは企業オフィスを計画した別の制度であり、公式記録に完成室内と平面図がある。Colony Clubの三室とは時代も依頼も違うため、同じ部屋の前後像として扱わない。近代化を「装飾から合理化への単純な勝利」と描くのではなく、異なる依頼の記録をそれぞれ読む。^[3]^[1]

Knollの公式記録では、Florence Knollが1946年にPlanning Unitを始め、企業のオフィスを家具一脚ではなく室全体で計画した。Connecticut General本社では建築家SOMと協働し、家具・材料・照明などを原寸模型で試した。Cowles Publicationsのオフィスには施工や設備に加え、床材、ブラインド、植物、絵画まで別の図面・仕様

が用意された。de Wolfeの三室と照合するなら、両者に共通する「用途に応じた一室の構成」と、会員クラブ対企業執務室という依頼の違いを分けて書く。Knollの完成室内と平面図は公式記録を開いて確かめ、de Wolfeの三室と用途・時点・表現媒体を分けて読む。[\[3\]](#)[\[1\]](#)

三室とも1913年の著書で公表されたが撮影日までは確定していない。刊行年を撮影年に書き換えず、出版物に選ばれた室であることを図版の来歴として記す。[\[3\]](#)[\[1\]](#)

READING PRACTICE

一枚に戻って考える

Colony Clubの食堂・寝室・格子の室を並べ、固定した壁面、移動できる家具、人の活動の位置を三欄で記し、モノクロ写真から言えない色と使用感を挙げよ。

考える手がかり：三室は同じ施設の異なる用途。壁・家具の配置は見えるが、色票、利用者の評価、給仕の動きは原著と追加記録なしには断定できない。

言える範囲

1913年の出版物に選ばれたColony Club三室と、旧初代建物の2012年外観・2016年階段ホールを示す。現在の階段ホールをde Wolfe時代の内装としない。Knoll Planning Unitは公式記録の写真と本文を参照して職能史の対照を読めるが、掲載図にはその完成室内がない。

SOURCE REGISTER

出典・図版

[\[1\] Cooper Hewitt, Elsie de Wolfe and Colony Club](#)

<https://www.cooperhewitt.org/2015/11/02/meet-the-hewitts-part-fifteen/>

[\[2\] Cooper Hewitt, Chanler and Colony Club](#)

<https://www.cooperhewitt.org/2017/04/03/cooper-hewitt-short-stories-the-fantastic-beasts-of-robert-winthrop-chanler/>

[\[3\] Knoll, The Planning Unit](#)

<https://www.knoll.com/story/shop/the-planning-unit>

[\[4\] Elsie de Wolfe, The House in Good Taste, 1913](#)

<https://www.gutenberg.org/files/14715/14715-h/14715-h.htm>

[\[5\] Elisa.rolle](#)

https://commons.wikimedia.org/wiki/File:First_Colony_Club_House,_New_York_City,_NY.jpg

[\[6\] Beyond My Ken](#)

https://commons.wikimedia.org/wiki/File:AADA_Colony_Club.jpg

VOLUME 01 / PART IV / CHAPTER 45

なぜ戦後の公共 建築は、コンク リートと歩く都 市を前面に出し たか

バービカンを、粗いコンクリートの好みだけで
覚えない。戦災後の再開発で、住居、学校、芸
術施設、歩行路、車の道を一つの敷地に重ねた
都市として読む。

英国・ロンドン、1950年代設計／1962-1982年建設

実物・記録を見比べる

出典 9 件



▶ Julian Herzog (Website) ・ Barbican Estate 1962-82年建設／写真:
2026年・CC BY 4.0 図版情報

上を歩き、下を通す

Historic Englandの指定記録は、住宅、学校、音楽学校、芸術センター、駐車場、歩行デッキ、水路を一体の敷地として列挙する。写真で橋、池、住居棟、歩行者の高さを確認したら、同じ視点から車の入口や地上の通路がどう見えるかを探す。歩行者と車を分ける構想は俯瞰写真なら理解しやすいが、段差の多さや迷いやすさは歩いて初めて分かる。現在の美しい水辺写真だけで「公共性が十分」と結論しない。地区の内部で暮らす人、施設へ来る人、通り抜ける人では同じデッキの意味が異なる。[\[1\]](#)[\[3\]](#)

Barbicanの歩行者デッキは地上の道路と異なる高さにあり、庭や水面を見下ろす視点を作る。高架の通路を「車から人を守る理想」とだけ捉える前に、段差を上げる方法、初めて来る人の道の探しやすさ、住む人と訪問者で違う入口を確認する。図面上の分離と、実際に迷わず移動できることは別だ。写真で見える欄干や階段の位置は手がかりになるが、すべての連絡経路を一枚の眺めから復元できない。[\[1\]](#)[\[3\]](#)

高架の歩行路を上下から確かめる

Barbicanの写真では、水面や住居の間を通る高い歩行路が見える。歩行者と車の経路を分ける計画の存在はHistoric Englandの指定記録が支え、写真は一部の接続を示す。高架を上から見た写真だけだと、下の階にどう降りるか、暗い場所が生まれるか分からない。高低差を単なる造形の迫力として眺めず、入口、階段、スロープ、住居への扉を一枚ずつ探す。歩く人の身体条件によって同じ高架の価値が変わる点は、現場のアクセシビリティ調査で確かめる。[\[1\]](#)[\[2\]](#)



同一対象

湖と歩行通路

Barbican Estate 1962-82年建設／写真: 2026年

同じ団地の別視点。水面と通路の高低差を追う。

Julian Herzog (Website) · [CC BY 4.0](#) · [元資料](#) [\[5\]](#)



同一対象

高架と下層をつなぐランプ・上から

Barbican Estate 1962-82年建設／写真: 2014年

2014年、Barbican Centreのレベル1と高架歩道をつなぐランプ。上下層の接続を具体的に見る。

Chris McKenna · [CC BY-SA 4.0](#) · [元資料](#) [\[7\]](#)



同一対象

同じランプ・下から

Barbican Estate 1962-82年建設／写真: 2014年

同じランプを下から見る。前図と比較し、勾配と折り返しを実景で確かめる。寸法や適法性は測れない。

Chris McKenna · [CC BY-SA 4.0](#) · [元資料](#) [\[8\]](#)

Historic Englandは住戸が公共ポディウムから分岐する歩行路を経て、四戸または五戸のまとまりでアクセスされる箇所を記す。写真で見える一本の高架を全戸共通の廊下と考えない。水面へ伸びる歩行路も指定記録に現れるが、実際の居住者が毎日どのルートを選ぶかは記録だけで分からない。図面上の接続と人の習慣は別に調べる。^[1]
^[2]

45 / 03

コンクリートは表面と構造の両方

指定記録は鉄筋コンクリートの構造だけでなく、表面を叩いて骨材を見せる仕上げ、塔とテラス住棟の異なる構造、厚く反り上がる欄干を具体的に記す。細部写真では「荒い灰色」という印象を止め、どの面が荷重を受け、どの面が手すりとして身体に触れ、どの面が天候を受けるかを分ける。住棟には木の窓枠や煉瓦、植栽箱もあり、バービカン全体が一種類の生コンクリートで出来たわけではない。材料の組み合わせが、住宅の私的な寸法と巨大な公共部分の縮尺をつなぐ。^[1]



同一対象

高架からの住居群

Barbican Estate 1962-82年建設／写真: 2026年

同じ団地をCromwell Highwalkから見る。住居と公共通路の接点を探す。

Julian Herzog (Website) · CC BY 4.0 · 元資料^[6]

高い通路からの撮影は住宅棟を美しいリズムとして捉えるが、住居の窓からは池や他棟が別の距離に見える。外部の写真だけでプライバシーや騒音の程度を評価しない。居住者が何を選べるかは住戸図面と聞き取りが必要である。^[1]

45 / 04

コンクリートの表面と保存の時間

現況写真で見える荒いコンクリート面は、打設、型枠、仕上げの選択を考える入口となる。ただし写真の色や汚れをすべて設計時の意図と呼べない。雨水、補修、清掃で表面は変わる。指定記録は住宅だけでなく学校、芸術施設、歩行ポディウムを複合体として評価する。したがって一棟の「ブルータリズム」として抽出するより、水辺、

高架、住居、文化施設がどうつながるかを図版の異なる視点で重ねる。運営が変わったとき通路がどう使われるかは、現地の時間帯別の観察が要る。[\[1\]](#)[\[2\]](#)



同一対象

Frobisher Crescentの柱廊

Barbican Estate 1962-82年建設／写真: 2026年

2026年の同団地。露出コンクリートの柱、レンガ舗装、歩く人の位置を高架の写真と分けて読む。

Julian Herzog (Website) · [CC BY 4.0](#) · [元資料](#)[\[9\]](#)

45 / 05

長い建設と変わるプログラム

Chamberlin, Powell and Bonの計画は1950年代に始まり、芸術センターの部分は1960年代に再設計され、建設は1982年まで続いた。完成年一つで示すと、事業主体であるシティ・オブ・ロンドン、技術者、資金と用途の変化が隠れる。Historic Englandは住宅のバルコニーや窓、屋上部の多様な型を細かく区別し、一枚の典型写真で全住戸を代表させない。戦後の住宅供給や文化施設の集積を「ブルータリズムの形の原因」と一方向に語るより、都市計画、施工、保存制度が重なった結果として建物を読む。[\[1\]](#)[\[2\]](#)

建物群のコンクリートを均一な「ブルータリズム」の表面と呼ぶと、住宅塔、低層の集合住居、文化施設、池、植栽の関係が薄れる。Historic Englandの指定記録は、第二次大戦後の破壊された区域を再開発した都市計画と建設段階を詳述する。完成した景観には復興政策、居住と公共文化の配分が刻まれている。水面と庭の写真は生活の質を示唆しても、住民の満足度や階層構成は示さない。保存指定は価値判断の史料であり、現在の全利用者の意見ではない。[\[1\]](#)[\[2\]](#)

公共通路と私的住戸が交わる境界には、見渡しやすさと見られたくない気持ちが共存する。外観の秩序をそのまま生活の秩序と呼ばず、住戸の向きやバルコニーの深さを、確認できる図面・居住記録と比べる。[\[1\]](#)[\[2\]](#)

ランプを上下から撮った二枚を追加したことで、高架歩道の「どこで降りられるか」を一か所について実景で確かめられる。ただしランプの勾配、幅、手すりの高さを画像のピクセルで測らない。現在のアクセシビリティを問うなら実測と運営の案内が必要になる。コンクリートの迫力と歩きやすさを同じ評価にしない。[\[1\]](#)[\[2\]](#)

45 / 06

図版が示す都市と見せない都市

高架・住宅・水面がわかる三枚を選び、撮影位置を簡単な見取り図に記し、水面を共通の目印として高架と住宅の向きを合わせる。写真に見えない道路や地下駐車場の正確な位置は指定文書と平面図に譲る。完成した姿の写真から、数十年に及ぶ建設過程や戦後ロンドンの住宅政策をそのまま読み取れない。建築の強い形と、誰に住居が割り当てられたかという制度を別の欄で照合することで、視覚的印象を歴史説明に変える。[\[1\]](#)[\[2\]](#)

45 / 07

利用者の評価を表面に投影しない

指定され守られる価値があることと、全ての住民・来訪者に使いやすいことは違う。写真には手すり、段差、開放的な池が写るが、夜間の安心感、車椅子の経路、維持費、実際の居住者の経験は写らない。逆に「迷路」「冷たい」という定型句だけで批判するのも、現場の具体的な経路を見落とす。施設側の現行案内、指定記録、建設時写真を別々の時点の資料として照合する。ここで学ぶのはコンクリートの見た目ではなく、公共と私的生活を垂直方向に配した計画の利点と難しさである。[\[1\]](#)[\[3\]](#)

上から撮った写真では湖、歩道、塔が一つの構図にまとまり、居住者が毎日どこで荷物を運ぶかは見えにくい。地上からの写真を並べ、入口、橋、階段、建物の下の暗がりや地図と対応させる。Barbicanは多層の歩行計画を持つため、近道に見える道が実際には遠回りかもしれない。形の複雑さを欠点と断定するのではなく、初訪問者、居住者、配送者で異なる移動を調べる。戦後の再開発では失われた街路を新しい公共空間へ置き換える判断があった。Historic Englandの保存評価はその建築的価値を説明するが、住みやすさの統計ではない。図版から読める高低差と、現地調査で初めて分かる移動の容易さを明確にする。[\[1\]](#)[\[3\]](#)

Highwalkの実景を読んだ後にHistoric Englandの指定記録へ戻ると、見えていた住居・高架・水面が一体の計画として扱われた理由を追える。写真の一角が公的に評価されたことと、住む人がすべての経路を快適と感じたことは同義ではない。指定という制度の評価と、住民や来訪者の経験は別に記録する。[\[1\]](#)[\[3\]](#)

READING PRACTICE

一枚に戻って考える

高架・住宅・水面がわかる写真を選び、住居・歩行路・水面の位置関係を描き、写真だけで評価できない利用上の問題を一つ選べ。

考える手がかり：高さと通路の交差は写真で読める。段差の連続、夜の安全、住民の満足度は現地調査や使用記録が要る。

言える範囲

本章はバービカン一事例。戦後の公共建築やブルータリズム全体の代表として一般化しない。

SOURCE REGISTER

[1] [Historic England, Barbican list entry](#)

<https://historicengland.org.uk/listing/the-list/list-entry/1352667>

[3] [Barbican, Our Building](#)

<https://www.barbican.org.uk/our-story/architecture/our-building>

[5] [Julian Herzog \(Website \)](#)

https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Barbican_Estate_Lakeside_City_of_London_2026_10.jpg

[7] [Chris McKenna](#)

https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Barbican_Centre_-_ramp_between_level_1_and_highwalks_-_view_from_top_01.jpg

[9] [Julian Herzog \(Website \)](#)

https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Barbican_Estate_Frobisher_Crescent_City_of_London_2026_05.jpg

[2] [Historic England, Building the Barbican](#)

<https://historicengland.org.uk/images-books/archive/collections/photographs/building-the-barbican/>

[4] [Julian Herzog \(Website \)](#)

https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Barbican_Estate_City_of_London_2026_01.jpg

[6] [Julian Herzog \(Website \)](#)

https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Barbican_Estate_City_of_London_2026_07.jpg

[8] [Chris McKenna](#)

https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Barbican_Centre_-_ramp_between_level_1_and_highwalks_-_view_from_bottom_01.jpg

VOLUME 01 / PART IV / CHAPTER 46

なぜヴァナ・ヴェンチュリー邸の正面は、親しみある家型をずらしたか

Vanna Venturi Houseの正面で見慣れた「家型」の破風と窓のずれを読み、側背面の写真でその記号が建物全体の単純な箱ではないことを確かめる。平面と生活動線は未掲載の原図・使用記録へ分ける。

米国・フィラデルフィア、1959-1964年

実物・記録を見比べる

出典 8 件



▶ Carol M. Highsmith (1946-) Alternative names Birth name: Carol Louise McKinney Artist name: Carol...・住宅1959-64年設計・建設／写真, 1980年・Public domain 図版情報

正面は分かりやすく、近づくとずれる

外観写真に三角屋根、大きな切れ目、中央に見える煙突と玄関を探す。一見対称の顔を持ちながら、開口の大きさや屋根の切断で単純な均衡を崩す。後年のHABS調査は、この住宅を戦後に支配的だったガラスと鋼の箱への別の道として位置づけ、設計者Robert Venturiの母を施主とする個人的な依頼だったことも記す。だから形の引用を流行だけで説明できない。母の生活や住宅の具体的要件を確かめずに「機能を拒んだ」とは言えない。外観は街から見える記号を、室内は人が通る順序を示し、それぞれ別の証拠となる。^[1]

正面の切妻は住宅らしい輪郭を持つが、左右の窓と煙突、入口の位置は対称をずらす。近くから見ると壁の線が単純な「子どもの家」の記号ではなく、内部の部屋と階段を納めるための折衷だと分かる。LOCの写真は実在建物の面を写し、DAMの所蔵図面は設計者の平面操作を伝える。写真だけで平面を推定せず、図面の線を竣工した配置とすぐ同一視もしない。どの図が計画案か実施案か、年を確認する。^[1]

正面の家型を線で読む

正面三枚と側背面二枚を並べる時は、まず正面の屋根の左右の傾き、切れた頂点、正面入口、窓、煙突を一枚ずつ線でなぞる。家を表す単純な三角形を提示しながら、その左右が完全には一致しない。この「ずれ」は抽象的な近代の記号ではなく、実際の立面にある位置の違いとして見える。別の季節の写真で木の葉が隠す範囲を比べ、見えない部分を想像で補わない。写真の色差は光の差か塗装の差か、この組だけでは決められない。^{[1][2]}



同一対象

住宅正面・別撮影

住宅1959-64年設計・建設／写真:
2011年

同じ住宅の2011年の別写真。季節と撮影位置の差を考慮する。

Smallbones・CC0・元資料^[5]



同一対象

早朝の正面

住宅1959-64年設計・建設／写真:
2010年

2010年12月、別時刻に撮影された同じ家の正面。屋根頂部、入口、煙突のずれを輪郭線で確認する。

Smallbones・Public domain・元資料^[6]



同一対象

住宅の南西・側背面

住宅1964年完成／写真: 2010年12月2日

正面とは別の南西側からの2010年実景。家型の破風が側・背面へそのまま続くわけではない。

Smallbones・Public domain・元資料^[7]

早朝と秋の写真で正面中央の入口を対応させると、屋根の頂点や煙突が視覚的な軸からどう外れるか分かる。ただし樹木が重なる領域は同じ家でも見えたり隠れたりする。画像をトレースする際は、建物の輪郭と影・枝を別色にする。この分離だけで、「不均衡」が設計されたものか、撮影条件に由来するものかを分けられる。[\[1\]](#)[\[2\]](#)

46 / 03

外から読める破風・煙突・開口

正面に近づくと、家型の屋根は一つの分かりやすい三角形として現れながら、頂点の切れ目、ずれた煙突、左右で異なる窓によって安定した対称形から離れる。左右を厳密な鏡映として線を引けば、どこでずれるかが見える。内部の階段がどう折れるかは外観写真からは読めず、DAM所蔵の原平面をリンク先で照合する対象とする。この章の図版演習は正面の立面表現に限り、平面の動線を描かせない。外壁の表面色も季節・時刻で変わるため、別撮影の色差を塗装の変更と断定しない。[\[2\]](#)[\[3\]](#)[\[1\]](#)



同一対象

住宅の西側・背面

住宅1964年完成／写真: 2010年12月2日

2010年の背面。正面の象徴的な三角輪郭と異なる窓・量塊を確認する。

Smallbones · [Public domain](#) · [元資料](#) [\[8\]](#)

南西側と背面の実景では、正面に見える破風の図像と違う屋根・窓の構成を確かめられる。この差を平面の室名へ直接変換せず、原図で対応を調べる。[\[2\]](#)[\[3\]](#)[\[1\]](#)

46 / 04

資料の所在を視覚主張に変えない

Library of CongressのHABS記録とDAMの原平面・立面は、外観の成立史を確かめる重要な一次資料である。ただしこの章に掲載しているのは再利用条件が確認された外観写真であり、原図そのものではない。原図を未掲載のまま「平面が正面に反する」と図版演習で答えさせるのは証拠の飛躍になる。読者がリンク先で原図を開いた場合は、図の作成年と改訂、現状の部屋との違いを記録する。外観から内部の居心地や廊下の曲がり方を推測して結論にしない。[\[1\]](#)[\[2\]](#)

近代への批判は一軒から始まる

ヴァナ・ヴェンチュリー邸は、分かりやすい住宅の輪郭と、複雑な内部とを同時に成り立たせた。HABSはこの家をポストモダン建築の重要作と呼ぶが、それは後年の評価を含む。一邸の屋根形だけから、商業看板、都市のポップな記号、他国のポストモダン建築まで連続した運動として説明することはできない。設計者の原文や同時代の反応を追加し、後の歴史書の語彙を1960年代の住人の読みと混ぜない。比較対象として当時の「ガラスの箱」を挙げる時も、別建物の具体的な平面・外観を添えて違いを示す。^[1]

この家はVenturiが母Vannaのために設計した住宅である。理論書の挿絵として知られても、最初から純粋な宣言の模型として建ったわけではない。家族の住み方と地域の住宅形式を見ずに「近代への反抗」と一語でまとめると、生活の尺度が消える。後年の写真に写る樹木や塗装、周辺住宅は施工当初と変化している。保存された現在の姿と1960年代の論争は別の時間であり、理念と住居の使い心地のどちらも写真一枚で決められない。^[1]

前面だけを撮った二枚の写真では、家の内部にある階段や部屋の関係は分からない。原図を見た読者が自分で照合できるよう、玄関、正面窓、切妻の軸を写真に注記する。図面を模写せずとも、何が一一致し、何が写らないかを整理できる。^[1]

この住宅は母Vannaのための小さな住まいである。建築史の図版では正面が頻繁に引用されるが、外観を「ポストモダン」と分類することと、そこで暮らす人の経験を知ることは別である。窓の位置から室内の採光条件は仮説を立てられるものの、家具、日中の居場所、体調に合わせた使い方は内部史料が要る。様式名から生活の結論へ直行しない。^[1]

引用と生活の距離

ヴェンチュリーが歴史の家型を用いたとき、一般的な家のシルエットが近代住宅の均質な外観に対する問いになった。しかし母Vannaの生活に合わせた住宅としての判断と、後に建築史が象徴として読んだ価値は同一ではない。正面写真に写る入口は存在を示すが、その先の生活は写らない。作家の宣言、設計図、使用者の証言の三つを一緒に引用せず、各々がどの問いに答えるか分ける。^{[1][2]}

原図をリンク先で確認する読者には、現在の撮影と建設当初の図面を同じ透明紙のように重ねないよう促す。開口の寸法、植栽、改修の履歴が違いうからである。正面三枚で家型とそのずれを、側背面二枚で別の開口と量塊を観察できる。室内動線は美しい外観の印象から補えないという限界こそ、この章の演習の答えに含める。^{[1][2]}

写真と保存調査で分かる範囲

CommonsにあるCarol M. Highsmithの外観写真は撮影時の建物の見え方であり、1964年竣工時の色や植栽を保証しない。HABS記録は構造と歴史を整理した後年の調査文で、当時の居住者の日記ではない。DAMの図面は設計上の意図に近いが、建設中の変更や実際の使い勝手はそこから確定しない。母の名前を章題に入れるのは、この家を抽象的な形式実験だけにしないためである。形の矛盾が住む人にどう感じられたかは、確かな証言が見つかるまで留保する。^{[1][2]}

Venturiの住宅をポストモダン建築の「始まり」と紹介する時、先に1960年代の計画・建設と、後年に理論化され評価された時期を分ける。正面の家型が示す親しみやすさと、内部の複雑な動線は単純な反近代の標語ではない。平面を転載できない場合はDAM所蔵図面へ誘導し、図面の線と写真の窓・玄関を照合するための観察欄を残す。原図の権利を曖昧にして無断で写し取るより、写真で確認できる非対称と図面で確認すべき部分を分ける。住宅は母のための住まいだったという具体的な依頼を忘れず、理論書の一節だけから全空間の意味を決めない。^{[1][2]}

保存された住宅の公開条件も、撮影許可と実際の居住が変われば異なる。外観の読みを普遍的な住宅体験へ広げず、原図の閲覧時には版と年を添える。^{[1][2]}

撮影位置も残す。^{[1][2]}

READING PRACTICE

一枚に戻って考える

正面三視点と南西・西側の二視点を並べ、正面で繰り返される破風・入口・煙突と、背面では同じ形で続かない箇所を分けて記せ。室内の動線はどの原図が必要か答えよ。

考える手がかり：正面の左右差と側背面の窓・量塊の違いは実景で確かめられる。階段や室の連続はDAMの原平面を閲覧し、図面の年と現況の違いも記録する。

言える範囲

正面三視点と側背面二視点を別写真として掲載。DAM原平面・立面は閲覧リンクであり転載していないため、内部動線や正面と平面の因果は写真だけで立証しない。

SOURCE REGISTER

出典・図版

^[1] [Library of Congress, HABS PA-6776](https://www.loc.gov/item/pa4102/)
<https://www.loc.gov/item/pa4102/>

^[2] [DAM, Ground Floor Plan 1962](https://sammlungen.dam-online.de/detail/collection/c79994c1-220f-474d-be31-3486d2044821)
<https://sammlungen.dam-online.de/detail/collection/c79994c1-220f-474d-be31-3486d2044821>

[3] DAM, Elevations 1963

<https://sammlungen.dam-online.de/detail/collection/a86a8685-0cbb-40b6-a996-5b43c103e0d8>

[4] Carol M. Highsmith (1946–) Alternative names Birth name: Carol Louise McKinney Artist name: Carol M. Highsmith Carol McKinney Highsmith Description American photographer and architectural photographer Date of birth 18 May 1946 Location of birth Leaksville, North Carolina Work period 1981- Work location United States Authority file : Q5044454 VIAF : 84615840 ISNI : 0000000121418199 ULAN : 500251255 LCCN : n88121701 NAID : 10571735 WorldCat creator QS:P170,Q5044454

https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Vanna_Venturi_House_in_Chestnut_Hill,_Philadelphia,_Pennsylvania_LCCN2011631388.jpg

[5] Smallbones

https://commons.wikimedia.org/wiki/File:VVenturi_House_fall_11.jpg

[6] Smallbones

https://commons.wikimedia.org/wiki/File:V_Venturi_H_720am.JPG

[7] Smallbones

https://commons.wikimedia.org/wiki/File:V_Venturi_H_3.JPG

[8] Smallbones

https://commons.wikimedia.org/wiki/File:V_Venturi_H_1.JPG

VOLUME 01 / PART IV / CHAPTER 47

なぜバラガンは 色、壁、庭を近代住宅の中心に 置いたか

Barragánの自邸・仕事場では、街に向けた外壁と、内側で変わる光・色・庭の順序が別の表情を持つ。同じ住宅の外と内を対で読む。

メキシコ・メキシコシティ、1947-1948年

実物・記録を見比べる

出典 7 件



▶ Thomas Ledl・住宅兼仕事場1947-48年／写真: 2015年・CC BY-SA 4.0
図版情報

外壁は内部を先に見せない

街路からの写真は住宅と仕事場が控えめな外壁を持つことを示す。窓と扉の少ない外観だけで「色彩建築」と呼ぶと、内部に入るまで色が現れない順序を見落とす。UNESCOは1947–48年に建てられた自邸・仕事場を、光と空間の対話、色が形と材料に本質的な役割を持つ仕事と評価する。家が労働者階級の近隣にあることも記録される。外観と庭の写真を並べ、設計者が住む・働く・外の街に向ける態度を一枚のファサードに閉じなかったことを確かめる。^[1]



同一対象

Barragán自邸・別視点 I

住宅兼仕事場1947–48年／写真: 撮影年未確認

UNESCO関連の撮影による同じ建物の実景。撮影位置を原典ページで照合する。

Francesco Bandarin · [CC BY-SA 3.0 igo](#) · [元資料](#) ^[4]

街路側の壁は内部の庭をほとんど予告しない。内側へ移ると濃い色の面、天窓や開口からの光、植物の緑が順に現れる。UNESCOの推薦資料に示される平面・写真を参照して、壁の色だけでなく、入口から室、庭へ向かう視線がどこで折れるかを追う。鮮やかな一枚を「バラガンの色彩」として切り出すより、隠す面と開く面の順番を読む方が建物に近い。図版が外観だけなら内部経験を断定せず、内部の写真の掲載条件を別途確認する。^[1]

街路から庭へ視線が変わる

街路側の写真では、壁は近隣の建物の列に入り、内部の庭や鮮やかな色をほとんど見せない。階段室の写真では壁面に当たる光と奥の開口が、移動に伴って色の経験が変わることを示す。庭側写真は外から室内のガラス面を見る視点であり、庭の植物配置や奥行きを見渡す全景ではない。三者を置く順番は、実際の訪問経路をそのまま再現したものではなく、街路、内部、庭という境界を比較する教材上の順番と明記する。^[1]^[2]



同一対象

自邸・庭側からの視点

住宅兼仕事場1947-48年／写真: 2014年

2014年、庭からガラス越しに室内を見た写真。庭全景ではなく、庭と室の境界を写す。街路側外観とは別の視点。

Ymblanter · [CC BY-SA 3.0](#) · [元資料](#) ^[6]

庭側写真は窓ガラスに映る植物と、室内に見える床や家具の境界を示す。街路側の不透明な壁と合わせると、同じ家の外周が均一な「閉じた箱」ではないと分かる。ただし庭のどの位置から撮ったかが特定できないと、実際の訪問経路の長さや角度は復元できない。庭と居室の関係を概念図として描く場合は、実測平面と区別して推定線を使う。^[1]^[2]

47 / 03

色は壁紙の上の飾りではない

内部写真でピンクや黄の壁を見る時、色票の名前より光がどこから入り、どの面で反射し、次の室へ何が隠れるかを追う。UNESCO推薦資料は室内の順路、階段、庭、素材を豊富な図面と写真で示す。色は表面だけの装飾ではなく、壁の位置と開口、時間帯の光で立ち現れる。ただし写真の色調は撮影・印刷・画面設定に左右される。撮影者の作品としての色と、建物が実際に持つ塗料の色を分ける。庭の緑も一つの色面として扱えるが、季節と手入れで変わる生きた要素である。^[1]^[2]



同一対象

Barragán自邸・別視点Ⅱ

住宅兼仕事場1947-48年／写真: 撮影年未確認

同じ建物の第三視点。写真の色再現と実物の塗装色は区別する。

Francesco Bandarin・[CC BY-SA 3.0 igo](#)・[元資料](#) ^[5]

室内や庭の写真が不足した時、街路から見える無地の壁を色彩空間の代表としない。UNESCOが公開する推薦書の室内図版へ読者を誘導し、ページ上で出典と撮影時期を確かめる。転載できない図版が核心を担う章では、本文だけで空間の順序を再現したと装わない。^[1]^[2]

この章では内部図版の撮影点が未照合のため、外壁の視覚証拠と内部についての一次記述を並列に示し、両者を一枚の連続写真のように扱わない。^[1]^[2]

47 / 04

色の写真と塗装の履歴を分ける

UNESCOが登録するのは家と庭を含む建築全体である。現況の鮮やかな色を観察するときは、壁が光を受ける角度、撮影時刻、後代の塗り替え、画面の色再現を分ける。ある壁のピンクや黄を写真から拾ってそのまま当初の色票にできない。バラガンの作品を「メキシコ的な色」と一語で説明することは、具体的な設計者の選択と保存史を消す。どの写真がどの壁に相当するかを原典の場所情報と対応させ、確定しない撮影位置は未詳と記す。^[1]^[2]



同一対象

自邸・屋上の壁と空

住宅1948年完成／写真: 2015年7月21日

2015年の屋上実景。高い壁、空、塗装面の関係を見る。庭や家具の写真として扱わない。

Daniel Case · [CC BY-SA 3.0](#) · [元資料](#) ^[7]

屋上の第五図は庭ではなく壁と空を切り取る別の外部である。街路・室・庭越しの視点と対応させ、どの面が見えないように設計されているかを考える。 ^[1] ^[2]

47 / 05

住宅と仕事場、保存と生活

この建物は自邸と仕事場を含み、図書、家具、芸術作品、庭も保存対象となっている。UNESCOは厨房設備まで含む保全に触れる。つまりバラガンの空間は色壁だけを切り取って再現できない。同じ廊下でも働く人の動線と住人の私的な移動は異なり、家具の配置が変われば見え方も変わる。現在の保存住宅を1948年の毎日の生活の完全な再現としない。写真が示すのは現存する配置であり、当時の手入れや誰が家事を担ったかには別の史料が必要である。 ^[1]

この住宅は設計者の作品であると同時に、家具、蒐集品、庭、住居を保つ人の仕事によって変化する場だった。UNESCOが保存を評価する時、それは材料の固定だけでなく配置と利用の履歴を扱う。ピンクや黄を別の店舗に移せば同じ効果が出るという処方は避ける。素材の光沢、窓の方向、光が落ちる時刻、利用する人の距離が違えば色は別の経験になる。写真の色再現にも限界があるため、図版間の色差を設計変更と即断しない。 ^[1]

庭側からの視点は加わったが、庭全景や塗装の履歴を示す図版は揃っていない。登録機関の一次資料へ直接リンクし、埋め込んだ四枚に写る範囲を限定する。視覚上の欠落を文章の情緒で補わず、比較に必要な写真の撮影位置を具体的に追う。 ^[1]

47 / 06

境界は閉鎖と開放の両方を持つ

街路側の壁が閉じて見えることから、住宅がすべての人を拒んだという心理を推測できない。同様に庭側のガラスがあるから、内部が常に公開されたとも言えない。住宅兼仕事場は来客、家族、作業、庭仕事の異なる時間を持った。写真はそのうち一瞬の光を残す。色壁の効果を店舗へ直接コピーする前に、どの視線を遮り、どの視線をつなぐ必要があるかを事例固有の条件として問う。[\[1\]](#)[\[2\]](#)

家と庭を同一作品として扱う際、庭側の一枚を全景と呼ばない。ガラス越しに室内が見えるという具体を固定してから、庭の形、植栽の配置、入口からの順序を別の平面・写真で確かめる必要があると書く。外側と内側の両方があるという一般論ではなく、どの境界が不透明で、どの境界が視線を通すかを図版ごとに示す。[\[1\]](#)[\[2\]](#)

47 / 07

地域性を型にしない

壁と庭の強い色を「メキシコらしさ」とだけ説明するのは、設計者が選んだ抽象、宗教的・個人的な経験、国際的な近代建築との対話を短絡する。UNESCOはこの家を近代の仕事として評価しつつ、地域的な文化との結びつきを述べる。どちらか一方の「影響」を探すより、訪問者が外壁から室内へ移る際に、遠さ、暗さ、明るさ、庭の現れ方がどう変わるかを具体的に記述する。同じ住宅の複数の実景があれば順序の仮説は作れるが、室内を連続して歩いた体験の代わりにはならない。[\[1\]](#)[\[2\]](#)

Barragánの住宅は、街路から見える面と内部で発見する面に差をつける。現存写真を比較する時、撮影位置が入口、居室、庭のどこかを確定できない画像は、空間を歩く順番の証拠に使わない。UNESCOの図面や推薦書と対応できた箇所だけを明示する。写真の濃いピンクを塗料番号として使うことも避ける。撮影と画面の色管理が違い、庭の緑は季節で変わるからだ。住宅は見えた色の集合でなく、隠す壁、光を受ける壁、庭へ開く面の関係として設計された。別の場所に色だけをコピーするのではなく、そこで光と距離がどう働くかを問い直す。[\[1\]](#)[\[2\]](#)

UNESCOの登録は、建物、室内、庭の一体性を評価する制度の判断である。一方で現在の写真は保存公開の条件で撮られ、住居としての日々の変化は十分映さない。色壁を印象的な画像として使う前に、塗料の修復時期、開口の位置、どの面がいつ光を受けるかを記録する。そうすれば、色彩だけを切り離れた「バラガン風」の模倣ではなく、境界を設計する方法として学べる。[\[1\]](#)[\[2\]](#)

READING PRACTICE

一枚に戻って考える

街路側の閉じた壁と、庭からガラス越しに室を見る写真を分け、どの境界で光と視線が変わるか記せ。庭の全体構成として写真では不明な点も挙げよ。

考える手がかり：街路側は内部を隠し、庭側のガラスは内外の視線をつなぐ。庭全景・一日の光の変化・当初の色彩はこの図版だけでは分らない。

庭側から室内を見るCC BY-SA写真を追加したが庭全景ではない。各写真の撮影位置・塗装時期を照合し、写真の発色を当初の色票と同一視しない。

SOURCE REGISTER

出典・図版

[1] UNESCO, Luis Barragán House and Studio

<https://whc.unesco.org/en/list/1136/>

[3] Thomas Ledl

https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Luis_Barrag%C3%A1n_House_and_Studio_Street_view.JPG

[5] Francesco Bandarin

https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Luis_Barrag%C3%A1n_House_and_Studio-115242.jpg

[7] Daniel Case

https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Corner_of_roof_of_Luis_Barrag%C3%A1n_House,_Mexico_City.jpg

[2] UNESCO Nomination Dossier

<https://whc.unesco.org/document/5301>

[4] Francesco Bandarin

https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Luis_Barrag%C3%A1n_House_and_Studio-115240.jpg

[6] Ymblanter

https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Luis_Barragan_House_Garden.jpg

VOLUME 01 / PART IV / CHAPTER 48

なぜガンドの学校群は、土と屋根の関係を建物ごとに試したか

2001年の小学校、後年の増築、2011年建設中の図書室、2013年建設中の中等学校を同一の完成校舎と混同しない。土と屋根、日陰と学ぶ場所の関係が、建物の段階ごとにどう変わるかを読む。

ブルキナファソ・ガンド、2001年の小学校と2009-2013年の増築・別棟

実物・記録を見比べる

出典 7 件



▶ Schulbausteine・小学校2001年完成／写真: Commons登録2002年、Exif 2008年（実撮影年末確定）・CC BY-SA 3.0 図版情報

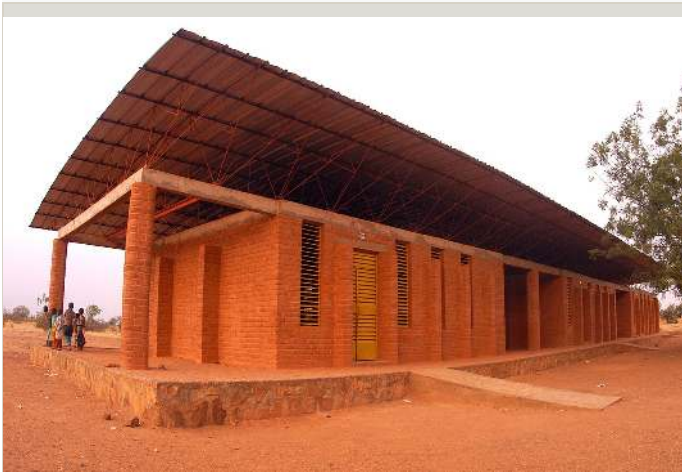
遠景より屋根と壁の隙間を見る

Francis Kéréの設計記録は、日差しを受ける金属屋根を教室の天井から持ち上げ、間に空気の通り道を作ったと説明する。地域にある土にセメントを混ぜた煉瓦を使い、雨を避ける軒を大きく出した。二枚の外観写真では屋根の厚み、壁の開口、教室前の影を比べる。第一の写真と第二の写真が同じ時期・同じ側面かどうかをキャプションで確認し、視点の違いを「改修」と読み違えない。外壁が土色だから「伝統建築」だと一語で言わず、材料を改良し、金属と組み合わせた具体的な工法として読む。[\[1\]](#)[\[2\]](#)

教室の写真を入手できない場合でも、外から見える窓の位置、屋根の持上げ方、軒の深さを断面の説明と照合できる。設計者による換気の説明は、写真に見える形を気流へ結びつける仮説だ。仮に同じ日に室内と外の温度を測った記録があっても、季節や人数が違えば年間を通じた性能は断定できない。学校の利用者にとっては、風だけでなく黒板の見え方や雨の日の音も重要となる。美しい外観を教室の総合的な質と混同しない。[\[1\]](#)[\[2\]](#)

二枚で同じ屋根の異なる縁を見る

Gando小学校の二枚は同じ施設の外側を写す。土セメントの壁の上に金属屋根が離れてかかり、深い軒の陰が窓や廊下付近に落ちる。離れた屋根と壁の間を図上で示せば、設計者が日射と空気の抜け方を問題にしたことへつながる。しかし写真だけで空気が常に同じ方向へ流れると決められない。風向、外気温、人数、開口の操作は撮影時点の画像に記録されていない。構造と温熱効果の間に測定という証拠を挟む。[\[1\]](#)[\[2\]](#)



同一対象

ガンド小学校・外観Ⅱ

小学校2001年完成／写真: 2005年

同じ学校の別視点。軒の日陰と開口の位置を読む。

Helge Fahrnberger / www.helge.at · [CC BY-SA 3.0](#) · [元資料](#) [\[4\]](#)

後年の増築写真を最初の小学校と明確に分ける。同じGandoの校地であっても、予算と人数が変われば屋根のスパンや室の数も変わる。二つの建設段階を同じ建物の表裏と呼べない。増築を対照に使うなら、元校舎の屋根の離れ、外壁の開口、軒下の歩く場所がどう繰り返され、どう変わったかを観察し、理由は設計者資料で裏づける。[\[1\]](#)
[\[2\]](#)

48 / 03

教育と共同施工の条件

設計者側は、この学校がブルキナファソ東部の不足していた教育施設を増やすために建てられ、依頼者をGandoのコミュニティとKéré Foundationと記録する。Aga Khan Awardも地域の人々が建設に関わった点を強調する。共同施工を美談にする前に、誰がどの工程を有償・無償で担い、どんな技術が残ったかを調べる必要がある。設計者の創意と地域の技能は別々の貢献で、どちらか一方だけを作品の作者として示さない。教室を利用する子どもや教員にとっての光と通風を問うことが、建築を単なる材料実験から教育の施設として読む入口となる。[\[1\]](#)[\[2\]](#)

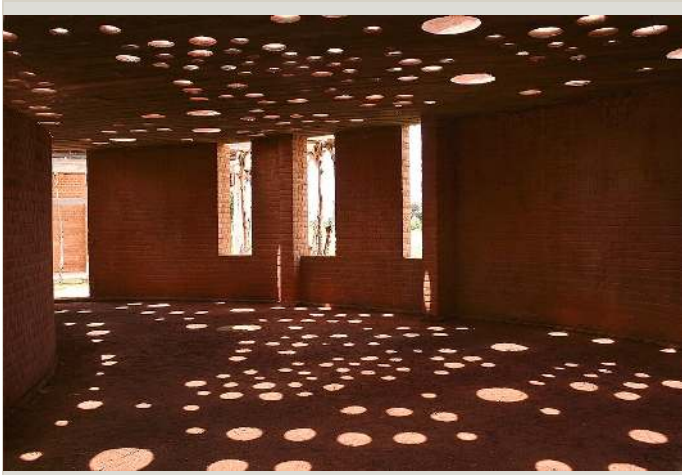
屋根の仕組みを模型図にして説明したくなるが、気流の矢印には原典に基づく入口と出口だけを記し、矢印の太さを温度差の測定に見せない。写真に写る隙間を構造の全断面だとせず、設計者の断面へのリンクを添える。[\[1\]](#)[\[2\]](#)

Kéré Architectureは完成年2001年、面積520平方メートル、依頼者をGandoのコミュニティとKéré Foundationと記す。学校数の不足に対し採光と換気を改善することが課題だった。写真に見える土セメント煉瓦は地域で得られる粘土を使い、雨から守るため軒が必要だという設計者の説明へ結びつく。単に「伝統素材を使った」とするより、材料が湿気と日射に対してどのような条件を持つかを読む。[\[1\]](#)[\[2\]](#)

48 / 04

地域施工を造形の出典に戻す

Kéré ArchitectureとAga Khan Awardの記録は、地域の人々が材料づくりや施工に関わったことを説明する。土を使った外観を「素朴」と呼ぶと、強度、維持、予算、熟練の判断が消える。掲載図に施工工程は写らない。施工参加の事実はAga Khan Awardの記録に依拠すると明示する。教室を使う子どもや教員の評価を設計者の説明で代弁せず、教育の運営と温熱の実測を次の調査として残す。[\[1\]](#)[\[2\]](#)



同一対象

学校複合の図書室・建設中

図書室建設中／写真: 2011年8月10日

2011年、ガンド小学校複合に増えた図書室の内部。天井の円形開口から光が入るが、2001年の原校舎の教室ではない。

GandolT・CC BY-SA 3.0・元資料 ^[6]

第四図の図書室は2011年に建設中の別棟で、天井の円形開口と室内の光を示す。原校舎の教室を写す資料にはせず、屋根を別の方法で考えた後年の例として読む。 ^[1] ^[2]

48 / 05

外観で読める二重屋根と、図面で初めて確かめる通風

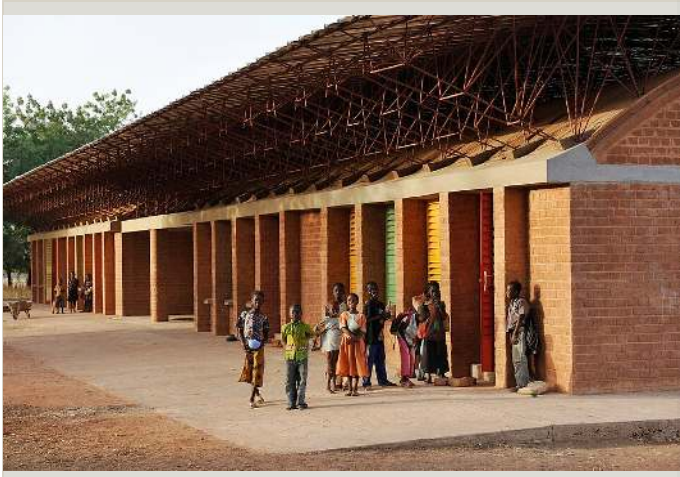
写真から見えるのは、土系の壁の上に持ち上がった屋根、軒が落とす影、開口と壁の位置である。二重屋根が日射を受け止め、間の空気が熱を逃がすという設計説明はKéré Architectureの一次資料に依拠する。外観二枚だけで教室内の気流方向を矢印で確定してはいけない。風向、季節、開口の使用、室内の人数により実際の換気は変わる。掲載図から演習できるのは屋根と壁の離れ、影、開口の位置であり、空気の流れは設計者の説明に基づく仮説に留める。 ^[1] ^[2]

Kéréの説明では、波形金属屋根を教室の天井から離し、その間に空気を通す。土の天井にあけた孔から熱い空気を逃がし、室内窓から冷気を引く構想である。これは設計者の機構説明で、掲載した外観写真から孔の位置と気流の実測を完全に確認できるわけではない。教材の図には矢印を仮説として描き、実際の温熱性能を断定する場合は現地の測定記録を要すると注記する。 ^[1] ^[2]

48 / 06

屋根の形を別の場所の処方にしない

別の学校に持ち上がった屋根を載せても、同じ効果になるとは限らない。日差しの強さ、雨、風、部材供給、修理できる技能、授業の人数が違うからである。この章では写真に写る壁、開口、軒影を具体的に読み、そこから設計者が解こうとした問題を一次記録で確認する。気流の効果は断面と測定、地域の参加は建設の記録、学習への影響は教員と生徒の経験へ、それぞれ証拠の道を分ける。 ^[1] ^[2]



別個体・対照

ガンド小学校の後年の増築

小学校増築（完成年未確認）／写真: 2009年

2009年撮影の校舎増築。2001年完成の最初の小学校とは別の建設段階。土と屋根の扱いを対照するが、同一教室の別角度ではない。

GandoIT・CC BY-SA 3.0・元資料^[5]



別個体・対照

中等学校・建設中

中等学校建設中／写真: 2013年1月14日

2013年、同じガンドの別の中等学校の工事現場。土の壁と屋根・中庭の作り方を完成した小学校と比較するが、同じ建物ではない。

GandoIT・CC BY-SA 3.0・元資料^[7]

元校舎と増築は同じ校地の別の建設段階である。写真を並べる時は、一方を「改善後」と決めつけず、完成年、教室数、利用する人の増加といった条件を確認する。主図の元校舎から軒・壁・開口を読み、増築写真では繰り返す要素と変えた要素を見つける。変化の評価は現場の利用記録に譲る。^{[1][2]}

2013年の第五図は中等学校の工事段階である。小学校の2001年完成写真と同じ工程の途中として混ぜず、壁と屋根の配置を学校群の別の実験として比較する。^{[1][2]}

48 / 07

別の学校へ形をコピーしない

Gandoの答えは、その土地で調達できる土、雨への対処、資金、子どもの教育機会と施工に関わる人々の条件を重ねたものだ。別地域の学校に大きな屋根だけを移しても、同じ働きとは限らない。1900年代初頭の米国の屋外教室と対照するなら、空気・病気・教育をめぐる別の時代の議論として置き、直接の系譜を捏造しない。写真が見せる美しい屋根線を評価する時こそ、学校がどの生活条件へ答えたかを忘れない。実際の教育成果は建築の写真ではなく、学校側の継続的な記録から検討する。^{[1][2]}

Gando小学校の建築説明を授業を受ける子どもの側へ戻すため、写真に人がいない時間と人が使う時間を分ける。通風が働くかどうかは風向、窓の開閉、人数、季節で変わり、屋根の隙間が写っているだけでは実測できない。赤土を使った壁の美しさと、雨や摩耗に対する維持の手間も別々に評価する。設計者と賞の資料は建設時の意図と評価を伝えるが、学校の運営や卒業後の学習成果を直接示さない。外観と教室内の画像密度が偏る場合、その偏りを記し、目に入る屋根を施設の全価値の代役にしない。^{[1][2]}

Aga Khan Awardの評価と建設参加の記録は、教室の造形だけでは見えない協働の証拠である。写真に生徒が少ない、あるいは写らないから、教育の需要がなかったとは言えない。地域の人が煉瓦を作り維持できるという設計目標は、修理可能性にも関わる。しかし何年後に何回補修されたかは別の保全記録が必要だ。^{[1][2]}

READING PRACTICE

一枚に戻って考える

2001年小学校外観、後年の増築、2011年図書室内観、2013年中等学校工事を建物・時点別に分け、各図で確かめられる土・屋根・光の要素を記せ。原校舎の通風経路を証明するには何が要るか。

考える手がかり：原小学校の軒と壁、図書室の円形採光、中等学校の工事中の壁と屋根は別建物の視覚証拠。原校舎の通風経路には断面・開口配置・現地測定が要る。

言える範囲

5図のうち原小学校は外観二点、2009年増築一点、2011年図書室内観一点、2013年中等学校工事一点。原小学校の授業中の教室と屋根断面は未掲載。図書室・中等学校を原校舎の内外として扱わない。風速・室温・学習成果は実測資料なしに論じない。

SOURCE REGISTER

出典・図版

[1] [Kéré Architecture, Gando Primary School](#)

<https://www.kerearchitecture.com/work/building/gando-primary-school-3>

[2] [Aga Khan Award, Primary School Gando](#)

<https://the.akdn/en/how-we-work/our-agencies/aga-khan-trust-culture/akaa/gando/primary-school>

[3] [Schulbausteine](#)

https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Primary_School_Gando.jpg

[4] [Helge Fahrnberger / www.helge.at](#)

<https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Gando-School-Burkina-Faso.JPG>

[5] [GandoIT](#)

https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Kere_primary_school_extension_gando.jpg

[6] [GandoIT](#)

https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Kere_library_gando.jpg

[7] [GandoIT](#)

https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Kere_Secondary_school_Gando.JPG